

〈資 料〉

# 食べ物の名数

## (5) 果物類の名数

### A Denominate Number for Food

#### (5) A Denominate Number for Fruits Shown in Classical Literature

森 田 潤 司  
(Junji MORITA)

#### はじめに

古来、果物類は大切な食べ物であったので、これを二種物、三果、三生果、三桃、四乾、四種物、四蜜、五果、八果、八珍果、百果などと名数で括ることがある。

本稿では果物に関する名数とその内容及び出典について整理し、さらに植物名について考察した。

#### 果 と 菓

『大漢和辞典』<sup>1)</sup>や『字通』<sup>2)</sup>などによると、果はこのみ(木の実)、くだもの(果物)である<sup>(注1)</sup>。『東雅』<sup>3)</sup>(享保4年-1719年)や『和菓子系譜』<sup>4)</sup>などにも果についての記載がある。

果はもともと木の上に実が成っているさまを表す象形文字である<sup>1)2)</sup>。『説文解字』<sup>5)</sup>(略して『説文』)(後漢代100年)木部に「果は木実なり。木に従ひ、果の形木上に在るに象る」とある<sup>1)2)(注2)</sup>。『正字通』<sup>6)</sup>(明代末編・清代1671年初刻)辰集 中集 木部にも〈果〉の条があり、果について詳しい記述がある。

後に果の字に艹(くさかんむり)を付けて菓の字が作られた。果と菓は同義に用いられ<sup>1)2)</sup>、ともに木の実のことをいった<sup>(注3)</sup>。『集韻』<sup>7)</sup>(宋代1039年)に「果菓、説文、木實也、或作菓、」<sup>1)</sup>とあり<sup>(注4)</sup>、『正字通』<sup>6)</sup>艸部に〈菓、俗果字〉とある<sup>(注5)</sup>。

#### 果 と 蒾

また、果蒾という語がある。『説文解字』<sup>5)</sup>艸部によると、「木に在るを果といい、艸(草)に在るを蒾という。」とする<sup>(注6)</sup>。『漢書』<sup>8)</sup>(後漢代82年頃)食貨志上「瓜瓠果蒾」の(唐)顔師古の注によると、後漢の應劭は「木の実を果といい、草の実を蒾という。」<sup>(注7)</sup>と木本植物の実か草本植物の実かで果と蒾を分けており、三国魏の張晏は「核のあるものを果といい、核のないものを蒾という。」と核の有無により果と蒾を分けており<sup>(注7)</sup>、また、晋の臣瓚は「木の上に在るのを果といい、地上に在るのを蒾という。」と果実の生る位置によって果と蒾を分けている<sup>(注7)</sup>。

和書では『倭名類聚抄』<sup>9)10)</sup>(承平年間931-938年)(以下『和名抄』<sup>9)10)</sup>が『説文』の内容を記し<sup>1)</sup>、〈張晏曰〉、〈應劭曰〉として『漢書』の注<sup>(注7)</sup>と同内容を記す<sup>(注8)</sup>。つまり、果は核をもつ木の実、このみ(古能美)、俗に言うくだもの(久多毛乃)のことであり、一方、蒾は核のない草の実、くさくだもの(久佐久太毛乃)のことである<sup>1)2)3)4)</sup>。『大和本草』<sup>11)</sup>(宝永7年-1709年)も『説文』を引き<sup>(注9)</sup>、『和漢三才図会』<sup>12)</sup>(正徳3年-1713年)果部は『説文』、『漢書』、『本草綱目』の記述をまとめている<sup>(注10)</sup>。『東雅』<sup>3)</sup>(享保4年-1719年)巻之十四果蒾第十四では『和名抄』、『日本紀私記』などの記述をまとめている。

#### 果と菓子

果は木の上になっている実、つまりくだもの(果

物)を示すので、菓子も同様にくだものを示す。

日本でも、菓子と菓子はくだものを示す同義語であったが、後にくだものの砂糖漬けや唐菓子と呼ばれる中国伝来の人工の菓子が出てくるようになって分裂し、自然の菓子(菓子)(果実)は木菓子と呼んで唐菓子と区別するようになった<sup>4)</sup>。たとえば、『類聚雑要抄』<sup>13)</sup>(平安時代12世紀成立、室町写本)巻一に「唐菓子并木菓子の盤は四寸五分也」とあり、唐菓子と木菓子が並記されている<sup>14)</sup>(注11)。『江家次第』<sup>15)</sup>(～天永2年-1111)東宮御元服の条では「唐菓子」に対して「木菓子四杯」とあり、注記に「松実・柏実・石榴・棗」とある<sup>4)</sup><sup>14)</sup><sup>16)</sup>(注12)。これらの書では木菓子と唐菓子が区別されている。

また、江戸時代の書だが『和漢三才図会』<sup>12)</sup>菓子には環餅・捻頭といった加工物を桃・李・杏・柑といった自然物に準じて、みな菓子ということを説明している<sup>4)</sup>(注13)。

次いで、木菓子が干菓子和木菓みに区別されるようになっていく。『厨事類記』<sup>17)</sup>(永仁3年-1295頃)は、菓子(果実)を木菓子と干菓みに分類し、干菓みに松の実・栢の実・栢榴・干し棗を挙げる一方で、木菓みに栗・橘・杏・李・柑子・桃・獼猴桃・柿などを挙げる<sup>18)</sup>(注14)。また、木菓みに挙げられたものが無ければ「時美菓」(その季節の果物)を用いるとしている<sup>4)</sup><sup>14)</sup><sup>18)</sup>(注14)。『厨事類記』<sup>17)</sup>の干菓子は『江家次第』<sup>15)</sup>での木菓みに相当している(注12)。

さらに後に、木菓子のうち、みずみずしく甘味のあるものを水菓子と呼ぶようになっていく<sup>4)</sup>。『守貞漫稿』<sup>19)</sup>(嘉永6年-1853)などにある通りである(注15)。

こうして、日本では菓子と菓子は同義に使われていたが、次第に果の字を自然の木の实、すなわちくだもの(果物)の意味に用い、果物・果実とは云うものの菓子とは云わなくなり、菓子・菓子の文字を用いるときには水菓子や果物を砂糖漬けにしたものを指して云うようになった<sup>4)</sup>(注3)(注16)。唐菓子や果物の砂糖漬けである菓子は、その後さまざまな種類のものへと発展していき、現在の人工の菓子となるに至っている。この間の経緯については『和菓子の系譜』<sup>4)</sup>や島田英雄「解説 食物儀礼史における「菓子」「鳥類」」<sup>20)</sup>に詳しい。

### 果物類の名数

以下に果物に関する名数とその内容の異同及び出典について述べる。さらに植物名について考察する。

ところで、「梅」は身近な果であるにも関わらず、名数のなかに取り上げられないことを付記しておく。

### 二種物 にしゅもの

平安時代公家の儀礼で供される二種の菓子。梨子(ナシ)\*1・棗(ナツメ)\*2。二種物は『類聚雑要抄』<sup>13)</sup>(平安時代12世紀成立、室町写本)に記される(注17)。

### 三果 さんか

文様の図柄ともする縁起の良い三種の果物。栢榴(ザクロ)\*3・仏手柑(ブッシュカン)\*4・桃(モモ)\*5。

栢榴は実が多いことから子孫繁栄を意味し、仏手柑は形が仏の手に似ていることから寿を意味し、桃は形状、実の成り方及び文字から豊稔と不老長寿を意味している。三果の組み合わせの文様を「三果文」とよび、吉祥文様のひとつである。

### 三生果 さんせいか

画題とする三種の果実(水菓子)。桃(モモ)・枇杷(ビワ)\*6・荔枝(ライチ)\*7。『茶道名数事典』<sup>21)</sup>三生果に挙げられる。

### 三桃 さんとう

古代中国で桃\*5の代表的三種。丸くてかたい三種の果実。

①荊桃(シナミザクラ)\*8・冬桃(フユモモ)\*9・榧桃(ケモモ)\*10。

『小學紺珠』<sup>22)</sup>(南宋代1296年以前)三桃に挙げられる三種の桃<sup>1)</sup>(注18)。

②侯桃(モモの一種)\*11・桜桃(シナミザクラ)\*12・胡桃(クルミ)\*13。

李周翰(唐代8世紀)が『文選』<sup>23abc)</sup>において『潘岳閑居賦』(西晋代3世紀)の三桃に注してこの三種の桃を挙げる<sup>1)</sup>(注19)。『図説 草木名彙辞典』<sup>24)</sup>三桃も挙げる。

### 三栗 さんりつ

『小學紺珠』<sup>22)</sup>三栗に挙げられる三種の栗(注20)。鋤栗・屋栗・間栗。それぞれの栗の品種内容は不詳。

### 四乾 しかん

中国で酒席に用いる四種の乾燥した果物とその種<sup>1)</sup>。一例として、瓜の種(ウリノタネ)\*14・杏仁(アンニン)\*15・榛の実(ハシバミノミ)\*16・核桃(クルミ)\*131)。

### 四種物 ししゅもの

平安時代公家の儀礼で供される二種の菓子。梨(ナシ)・棗(ナツメ)・栗(クリ)・菱(ヒシ)\*17。『類聚雑要

抄』<sup>13)</sup>に記される<sup>(注17)</sup>。

#### 四蜜 しみつ

中国で酒席に出される四種の蜜漬けの果物<sup>1)</sup><sup>24)</sup>。一例として、**梨** (ナシ)・**棗** (ナツメ)・**林檎** (リンゴ)\*18・**山査子** (サンザシ)\*19)。

#### 五果 ごか

よく栽培されている五種類の果物。五菓ともいう。

五果の語は、中国の古書では『東方朔占書』(撰者不詳。前漢代紀元前154年～紀元前92年の東方朔に仮託)<sup>25)</sup><sup>26)</sup>(注21)や『三国志 魏書』<sup>27)</sup>(西晋代3世紀後半)鄭渾伝<sup>1)</sup>(注22)、『五行大義』<sup>28)</sup>(隋代6世紀)(注23)、『黄帝内経素問』<sup>29)</sup>(王冰、唐代762年)<sup>1)</sup>(注24)、『荆楚歲時記』<sup>30)</sup>(六朝時代6世紀半ばごろ成立)(注25)などに見られる。

和書では『續々修東大寺正倉院文書』<sup>31)</sup>(奈良時代8世紀)<sup>14)</sup>(注26)、『西宮記』<sup>32)</sup>(平安時代10世紀)<sup>25)</sup>(注27)、『新儀式』<sup>33)</sup>(応和3年-963頃)<sup>16)</sup>(注28)、『権記』<sup>34)</sup>(平安時代10-11世紀)<sup>16)</sup>(注29)、『中右記』<sup>35)</sup>(寛治元年-1087～保延4年-1138)<sup>14)</sup>(注30)、『類聚雜要抄』<sup>13)</sup>(平安時代12世紀成立、室町写本)<sup>14)</sup><sup>16)</sup>(注31)、『明月記』<sup>36)</sup>(治承4年-1180～嘉禎元年-1235)<sup>25)</sup>(注32)、『二中歴』<sup>37)</sup>(鎌倉時代初期13世紀頃)<sup>14)</sup>(注33)、『厨事類記』<sup>17)</sup>(永仁3年-1295前後)<sup>14)</sup><sup>18)</sup>(注14)、『河海抄』<sup>38)</sup>(室町時代14世紀)<sup>25)</sup>(注34)などに五果(五菓)の語が見られる。

五果(五菓)は重要な栄養素を含む。五果(五菓)の働きについて、『五行大義』<sup>28)</sup>第三論配氣味や『黄帝内経素問』<sup>29)</sup>藏氣法時論篇に記載があり<sup>(注24)</sup>、『医心方』<sup>39)</sup><sup>40)</sup>(永観2年-984)はこれを引いて、

太素経<sup>(注35)</sup>に云う。五穀(穀物)は人の身体を養うものであり、五果(果物)は穀物の栄養を補い、五畜(肉類)は穀物の栄養の働きを高め、五菜(野菜)は穀物の栄養を増進させるものである。と

と記す。『医心方』<sup>39)</sup>はさらに続けて

注に云う。穀類、畜肉類、果物類、野菜類は、それらを用いて飢えを充たすときには、これを食物という。それらを用いて、病気の治療をするときには、これを薬という。この五穀・五畜・五菓・五菜など二十種のものは、これすなわち陰陽五行説で説く五性のいずれかの味をもっており、五臓六腑に気血をめぐらす本となる。虚けたるを充ちさせ気血を接ぐためにこれより大事なものはない。この世に性を受け、その生命を養ううえで少しの間も離すことができないものである、と。

と記している。まさに医食同源、薬食同源の思想に基づくものである。また、古代の五穀、五畜、五菓、五菜という分類は現代栄養学の「三色食品群」の分類に近いものであることがわかる。五畜は「三色食品群」の赤群(肉や血をつくるもの)のたんぱく質食品、五穀は同じく黄群(力や体温となるもの)の糖質食品、五果と五菜は同じく緑色群(からだの調子をよくするもの)のビタミンや無機質を多く含む野菜や果実ということになる。

五果(五菓)の内容についてまとめてみると、次の(1)①～⑦及び(2)①～③ようになる。

(1) よく栽培されている五種類の果実。

①**桃** (モモ)・**李** (スモモ)\*20・**杏** (アンズ)\*21・**栗** (クリ)\*22・**棗** (ナツメ)。

中国でよく栽培されている五種類の果実。

『黄帝内経素問』<sup>29)</sup>(唐代762年)の中の臓気法時論篇に記される<sup>1)</sup><sup>4)</sup><sup>11)</sup>(注24)、『北山醫話』<sup>26)</sup>(正徳3年-1713)などによると『東方朔占書』(前漢代紀元前2世紀頃)にも「五菓は李杏桃栗棗」とあるようである<sup>25)</sup>(注21)、『小學紺珠』<sup>22)</sup>(南宋代13世紀)動植類 五果の語注記<sup>(注36)</sup>や『羣書拾唾』<sup>41)</sup>(明代14世紀末)(注37)五果の語注記が挙げられる<sup>1)</sup><sup>4)</sup>。この五種が特に重視されていたことがわかる。

和書では『類聚雜要抄』<sup>13)</sup>(平安時代12世紀成立、室町写本)台五菓の割注<sup>14)</sup>(注31)、『二中歴』<sup>37)</sup>(鎌倉時代初期)五菓の語注記<sup>4)</sup><sup>14)</sup>(注33)、『厨事類記』<sup>17)</sup>(永仁3年-1295前後)五菓<sup>4)</sup><sup>14)</sup>(注14)、『拾芥抄』下2(鎌倉時代中期13-14世紀)五菓<sup>4)</sup>(注38)、『和爾雅』<sup>43)</sup>(元禄7年-1694)五菓の語注記<sup>(注39)</sup>、『増補下学集』<sup>44)</sup>(寛文9年-1669)五菓の語注記<sup>(注40)</sup>、『和漢名数』<sup>45)</sup>(元禄5年-1692)五菓の語注記<sup>(注41)</sup>、『譬喩盡並二古語名数』<sup>46)</sup>(天明6年-1786)五菓<sup>(注42)</sup>、『合類節用集』<sup>47)</sup>(延宝8年-1680)五菓の語注記<sup>(注43)</sup>、『書言字考節用集』<sup>48)</sup>(享保2年-1717)五菓の語注記<sup>(注44)</sup>、『大和本草』<sup>11)</sup>(宝永7年-1709)五果<sup>(注45)</sup>、『和漢三才図会』<sup>12)</sup><sup>16)</sup>五果<sup>(注10)</sup>などに挙げられる。

李・杏・棗・桃・栗の五果(五菓)は、儀式の際に陰陽五行説に従い供果などに使われた。『二中歴』<sup>37)</sup>五菓は、②の五種に次いで、「一説に云う」としてこの五種を挙げ、東は李、西は杏、南は桃、北は栗、中央は棗としている<sup>14)</sup>(注33)。

また、『厨事類記』<sup>17)</sup>は、木菓子は時菓子ともいい、栗・橘・杏・李・柑子・桃・獼猴桃・柿等であるとし、このなかから五菓を選び、〈陰陽寮注申〉により、李(東方)杏(西方)棗(中央)桃(西方)栗(北方)と当てている(注：陰陽寮の卜占の結果で配列を定めたというもの<sup>20)</sup>。なお、「杏西方」は「杏南方」の誤りか。)。木菓子がもし無け

れば、時菓（季節の果物）を用いるとしている<sup>4)14)18)</sup>(注14)。『拾芥抄』下42(鎌倉時代13～14世紀)飲食部は、五果は五行で説くいずれかの味をもつとし、「李(東方 酸)・杏(南方 苦)・桃(西方 辛)・栗(北方 鹹)・棗(中央 甘)」と方位と味を当てて記している<sup>16)</sup>(注38)。『五行大義』<sup>28)</sup>によると、五果の方位と味は『黄帝甲乙經』<sup>(注46)</sup>によるものである<sup>(注47)</sup>。

『東方朔占書』によると、五果の出来具合で穀物の出来具合を占うこともあった<sup>26)25)</sup>(注21)。『和漢三才図会』<sup>12)</sup>はこれを引いて

五果は五味・五色があつて五臓に應じる。占書には、五穀の収穫の多寡を知りたければ、五果の出来ぐあいを看ればよい。五果とは李・杏・桃・栗・棗である。占書には、李は〔小豆の収穫の多寡を主どる〕、杏は〔大麦を主どる〕、桃は〔小麦を主どる〕、栗は〔稲を主どる〕、棗は〔禾を主どる〕、とある<sup>12a)</sup>

と記す<sup>(注10)</sup>。

②柑(コウジ)\*23・橘(タチバナ)\*24・栗(クリ)・柿(カキ)\*25・梨(ナシ)

『二中歴』<sup>37)</sup>五果が挙げる五種<sup>14)</sup>(注33)。『河海抄』<sup>38)</sup>は〈掌中歴日〉として挙げる<sup>(注34)</sup>。『二中歴』<sup>37)</sup>は『掌中歴』を編集した書であるが、この五種に次いで①と③の五種を挙げる<sup>(注33)</sup>。

③松子(マツノミ)\*26・棗(ナツメ)・石榴(ザクロ)・橘(タチバナ)・栢(カヤ)\*27

『二中歴』<sup>37)</sup>五果が②及び①の五種に次いで「一説に云う」として挙げる五種である<sup>(注33)</sup>。また、『拾芥抄』下42五果も①に次いで「一説に云う」としてこの五種を挙げ、「近代これを用いる」とする<sup>16)</sup>(注38)。

④柑(コウジ)・栢(カヤ)\*27・栗(クリ)・柿(カキ)・梨(ナシ)

『拾芥抄』下42五果が①と③の五種に加えて〈又説〉として挙げる五種<sup>16)</sup>(注38)。ここでは②の「橘」が「栢」に変わっている。

⑤松子(マツノミ)・柏子(カヤノミ)\*28・干棗(ホシナツメ)・石榴(ザクロ)・搔栗(カイグリ)\*22

『類聚雑要抄』<sup>13)</sup>が〈食五菓〉(桃・李・杏・栗・棗)とは別に〈台五菓〉として挙げる五種<sup>16)</sup>(注31)。古本下学集の『榊原本下学集』<sup>49)</sup>(書写年次不明、文安元年～1444頃成立)は五菓の語注記に、少し表記は異なるが、松・柏・栗・棗・栢榴を挙げる<sup>(注48)</sup>。栢は栢と同義なので<sup>16)</sup>、柏子はカヤの実(榧子・栢子)の実であろう。

この五種のうち搔栗を除く松・柏・棗・栢榴は、唐菓

子に対して木菓子あるいは干菓子とされるものである。『江家次第』<sup>15)</sup>(～天永2年～1111年)東宮御元服の条を見ると「木菓子四杯」の注記に松実・柏実・石榴・棗とある<sup>(注12)</sup>。『厨事類記』<sup>17)</sup>では、菓子(果実)を木菓子と干菓子に分類し、干菓子に松の実・栢の実・栢榴・干し棗を挙げる<sup>18)</sup>(注14)。

⑥柑(コウジ)・橘(タチバナ)・栗(クリ)・杼(トチ・クスギ)\*29・梨(ナシ)。

北村季吟が『湖月鈔』<sup>50)</sup>(延宝元年～1673)で『河海抄』<sup>38)</sup>を引いてこの五種を挙げる<sup>(注49)</sup>。『図説 草木名彙辞典』<sup>24)</sup>植物名数編も同じ五種を挙げるが、おそらく『湖月鈔』を引いてであろう。

ここで、杼はトチヤクスギにあてられるが、どちらも実は漬くてそのままでは食用とはならない。そこで、改めて『河海抄』<sup>38)</sup>を見ると〈掌中歴日、五菓、柑橘栗柿梨〉<sup>(注34)</sup>とあり、『掌中歴』から編集した『二中歴』<sup>37)</sup>を見ても五菓は〈柑橘栗柿梨〉となっている<sup>(注33)</sup>。したがって『湖月鈔』<sup>50)</sup>の「杼」は「柿(柿)」の誤写かもしれない。もし、柿(柿)ならば柑・橘・栗・柿・梨となり、②の五種と同じになる。

⑦栗(クリ)・柿(カキ)・榧(カヤ)\*27・桃(モモ)・梨(ナシ)

『当流献方口伝書』<sup>51)</sup>(江戸中期写)が挙げる五種。同書では榧の実を干菓子とは別扱いして本式菓子の五菓(栗・柿・榧・桃・梨)の中に入れている<sup>62a)</sup>(注50)。

## (2) (性状からの分類)

①核果・膚果・穀果・櫛果・角果

『蜀都雜鈔』<sup>52)</sup>(明代)<sup>(注51)1)4)</sup>や『名数語彙』<sup>53)</sup>(～長享2年～1488頃)<sup>(注52)</sup>が挙げる果の分類。核果は棗(ナツメ)・杏(アンズ)など、膚果は梨(ナシ)・奈(アカリゴ)\*30など、穀果は椰子(ヤシ)\*31・胡桃(クルミ)・石榴(ザクロ)など、櫛果は松子(マツノミ)・栢仁(コノテガシワのミ)\*28など、角果は大小豆(ダイズ・アズキ)などである<sup>1)4)</sup>。

②仁果類・核果類・漿果類・乾果類・柑橘類

中村孝也が『和菓子の系譜』<sup>4)</sup>で挙げる果の分類。仁果類は柿・梨・林檎など、核果類は桃・梅・李・杏など、漿果類は葡萄・無花果など、乾果類は栗・胡桃・銀杏など、柑橘類は蜜柑・橙・柚子などである。仁果類・核果類・漿果類は特に糖度が高く甘味が多い<sup>4)</sup>。これを乾燥すると果液が濃縮されるので、さらに甘味が増し、芳香性も消化もよく、貯蔵性もよくなる。

③子・核・皮・房・殼

『五行大義』<sup>28)</sup>第三論配気味に記載される五果の分類。子はたね(種)のある果物で梨や榛の類、核は大きな種のある果物で桃や李の類、皮は皮のある果物で柑橘の類、房はふさのある果物で蒲陶(葡萄)の類、殻は殻のある果物で胡桃や栗の類である(注23)。五行説では子は木に配し、核は火に配し、皮は金に配し、房は土に配し、殻は水に配す(注23)(注47)。

八果 はちか・はっか

香圓(ブッシュカン)\*4・眞柑(コウジの一種)・石榴(ザクロ)・橙子(カブス・クネンボ)\*32・鵝梨(ナシの一種)\*33・乳梨(ナシの一種)\*34・楔楂(カリン)\*35・花木瓜(クサボケ)\*36。

『秋苑日涉』<sup>54)</sup>(文化4年-1807)が挙げる八種の果物<sup>14)</sup>(注53)。

八珍果 はちちんか・はっちんか

八つの珍味の果実。

①枇杷(ビワ)・桃(モモ)・楊梅(ヤマモモ)\*37・杏(アンズ)・李(スモモ)・荔枝(レイシ、ライチ)・柿(カキ)・銀杏(ギンナン)\*3821)。

『茶道名数辞典』<sup>21)</sup>などによると、これらを描いたものを八珍果図という。

②葡萄(ブドウ)\*39・梨(ナシ)・桃(モモ)・柿(カキ)・栗(クリ)・林檎(リンゴ)・石榴(ザクロ)・銀杏(ギンナン)または胡桃(クルミ)。

江戸時代に甲斐国の代表的な八種類の果物。峡中八珍果あるいは甲州八珍果ともいう。『甲斐叢記』<sup>55)</sup>(嘉永元年-1848)に記載されている。一説に、柳沢吉保が栽培を奨励したことから生まれたというのが不詳である。

百果・百菓 ひゃっか・ひゃくか

いろいろな果物。多くの果物。『周易』<sup>56)</sup>(紀元前7世紀頃)解に〈天地解而雷雨作、雷雨作、而百果草木皆甲坼〉<sup>1)</sup>と百果の語がある<sup>1)16)</sup>。『管子』<sup>57)</sup>(紀元前3世紀頃)立政にも百果の語がある(注54)。また、『神仙傳』<sup>58)</sup>(東晋・西晋代~343年)巻九に〈介象、字元則、會稽人、(中略)嘗爲吳王、種瓜菜百果、皆立生可食。〉<sup>1)58a)</sup>(介象は、字を元則といって、會稽の人であった。(中略)あるときは、呉王のために、さまざまな野菜や果物の種を播いたところ、たちまち芽が出て実がなり、食べることができた。)<sup>58c)</sup>と百果の語があり、『西崑酬唱集』<sup>59)</sup>(北宋初期10世紀~11世紀)巻下にある楊億の「櫻桃詩」にも〈百果獨先春〉<sup>1)</sup>と百果の語がある(注55)。

## 【植物名注】

以下に植物名称について考察する。各植物については『本草綱目』<sup>60)</sup>(明代・萬歴6年-1578撰成、萬歴23年-1596刊行)、『本草綱目啓蒙』<sup>61)</sup>(文化3年-1806版)、『本朝食鑑』<sup>62)</sup>(元禄10年-1697)、『大和本草』<sup>11)</sup>、『和漢三才図会』<sup>12)</sup>にも詳しい。『東雅』<sup>3)</sup>、『本草図譜総合解説 第三卷』<sup>63b)</sup>、『奈良朝食生活の研究』<sup>64)</sup>は各植物について出典を引いて考察している。『図説 草木名彙辞典』<sup>24)</sup>にも各植物の別称及び出典が詳しい。『植物渡来考』<sup>65)</sup>は日本への伝来について詳しい。

### \*1 梨

ナシ<sup>3)12)24)39)40)65)</sup>。バラ科の落葉高木。漢名は梨<sup>24)60)61)</sup>。『本草和名』<sup>66)</sup>(延喜18年-918頃)や『倭名類聚抄』<sup>9)10)</sup>(承平4年-934頃)(以下『和名抄』)に和名はナシ(奈之)<sup>(注56)3)</sup>とある<sup>64)</sup>。『東雅』<sup>3)</sup>によるとその義は不詳。梨の語は『万葉集』<sup>67)</sup>(天平宝字4年-760頃か)にも登場し<sup>68)</sup>、『延喜式』<sup>69)</sup>(延長5年-927完成。康保4年-967施行)では栽培していることがわかる<sup>64)</sup>。

### \*2 棗

ナツメ<sup>3)12)24)39)40)65)</sup>。クロウメモドキ科の落葉低木。漢名は棗<sup>24)60)61)</sup>。『本草和名』<sup>66)</sup>(注57)や『和名抄』<sup>9)10)</sup>(注58)3)に和名ナツメ(奈都米)とある<sup>64)</sup>。『延喜式』をみると栽培されていたようである<sup>64)</sup>。

### \*3 石榴

ザクロ<sup>3)11)12)24)39)40)65)</sup>。ザクロ科の落葉小喬木。漢名は柘榴。別漢名に安石榴<sup>24)60)61)65)</sup>。『本草和名』<sup>66)</sup>に安柘榴の和名はサクロ(佐久呂)とあり、『和名抄』<sup>9)10)</sup>に柘榴の和名はサクロ(佐久路)とある(注59)。平安時代時代以前に伝来したと云われるが、『万葉集』には詠まれていない<sup>68)</sup>。

### \*4 仏手柑

ブッシュカン<sup>12)24)</sup>。ミカン科の常緑低木。観賞用に栽植。本種はマルブッシュカン(丸仏手柑)の変種で、果実が十数本の指状になることからブッシュカン(仏手柑)と云う。マルブッシュカンの漢名は枸櫞<sup>かぶち かぶち</sup><sup>24)60)61)</sup>、香圓<sup>47)60)</sup>。枸櫞の和名は、『本草和名』<sup>66)</sup>に〈枸櫞(中略)和名加布知〉とあり、『和名抄』<sup>9)10)</sup>枳殻の条に〈枸櫞(中略)和名加布智〉とあるように、カブチ(加布知・加布智)である。『本草綱目啓蒙』<sup>61)</sup>枸櫞の条には「マルブッシュカン」とあり、「枸櫞と仏手柑と二物なり」と記す。

### \*5 桃

モモ<sup>3)12)24)39)40)70)</sup>。バラ科の落葉低木。漢名は

桃<sup>24)60)61)</sup>。『本草和名』<sup>66)</sup>桃椶桃梟<sup>(注60)</sup>及び『和名抄』<sup>9)10)</sup>桃子<sup>(注61)</sup>に桃の和名はモモ(毛毛)とある。桃は果実を食用とし、種子のなかの核は薬用とされた。

中国の桃には数種があり<sup>12)62)71)</sup>、毛桃<sup>60)72)</sup>、白桃<sup>72)</sup>、朱桃<sup>72)</sup>、他に楔(荊桃・桜桃・含桃)、旄(冬桃)、榠桃(山桃)などである。『爾雅』<sup>73)</sup>(前漢代紀元前2世紀)釋木に「楔、荊桃は今の桜桃なり。含桃なり。旄、冬桃は、実が冬になって熟すもの。榠桃、山桃は山中に生じるもの。実は桃の如くして小さく、核が割れない。」と記される<sup>(注62)</sup>。つまり、楔、荊桃、桜桃、含桃は〈\*8 荊桃〉の項で述べるように今のシナミザクラ(桜桃)であり、榠桃、山桃は〈\*10 榠桃〉の項で述べるようにケモモ(毛桃)のことである。旄、冬桃は〈\*9 冬桃〉の項で述べるように11・12月に熟する品種である。日本でも奈良時代には種々の桃があった<sup>64)68)</sup>。

ところで、「モモ」の語源について『牧野 新日本植物圖鑑』<sup>70)</sup>は、「日本名のモモは、マミ(真実)モエミ(燃実)モモモ(百)の諸説があるが何れも肯定しがたい。日本では丸くて中のかたいものをモモといい、今日のヤマモモ(在来種のヤマモモ科のヤマモモ(山桃・楊梅))の称であったが、中国より果肉が多く果皮に毛がある本種が渡来し、それに本種がとってかわったものであるとの説が最も妥当」と記している。

#### \*6 枇杷

ビハ<sup>12)24)39)40)</sup>。ビワ。ビワ科の常緑高木。漢名は枇杷<sup>24)60)61)</sup>。『本草和名』<sup>66)</sup>はビワ(枇杷)を比波とよみ、『和名抄』<sup>9)10)</sup>はビワ(琵琶)とよむ<sup>64)</sup><sup>(注63)</sup>。和名は漢名の音読による<sup>24)</sup>。『延喜式』にも枇杷の語が見られる<sup>64)</sup>。

#### \*7 荔枝

ライチ。レイシ<sup>12)24)65)70)</sup>。ムクロジ科の常緑喬木。漢名は荔枝<sup>24)60)61)</sup>。室町時代末期書写本の『下学集』<sup>74)</sup>(文安1年-1444成立)に記載があるので荔枝は室町時代には知られていたことがわかる。他に『元和本 下学集』<sup>49)75)</sup>(元和3年-1617)草木門レイシ、『多識編』<sup>76)</sup>(慶長17年-1612成立)<sup>(注64)</sup>、『大和本草』<sup>11)</sup>卷之十木之上リチイ、『和漢三才図会』<sup>12)</sup>夷果類レイシ、『本草綱目啓蒙』<sup>61)</sup>、『物品識名』<sup>77)</sup>(文化6年-1809跋)禮部レイシなどにある。『本草綱目啓蒙』<sup>61)</sup>卷二十七果部果之三荔枝には「通名リチアン、リツイ、リチイ」とある。

#### \*8 荊桃

モモの一種。シナミザクラ(支那実桜)<sup>24)70)</sup>。バラ科の落葉低木。『爾雅』<sup>73)</sup>釋木に〈楔、荊桃。〔注〕今櫻

桃。〉とあり<sup>(注62)</sup>、楔の別名に荊桃を挙げ、今の桜桃としている。荊桃、楔、桜桃は日本ではシナミザクラ(支那実桜)<sup>24)70)</sup>あるいはシナオウトウ(支那桜桃)<sup>11a)</sup>と呼ぶ。また、科皮木、支那桜、実桜、唐実桜と呼ぶ<sup>24)</sup>。『本草綱目』<sup>60)</sup>果部第三十卷桜桃の釈名に〈鵝桃(禮注)含桃(月令)荊桃<sup>60)</sup>〉と荊桃の名がある。和書では『本草和名』<sup>66)</sup>桜桃の一名にも荊桃が挙げられているが<sup>(注65)</sup>、『和名抄』<sup>9)10)</sup>には荊桃の条がない。『和漢三才図会』<sup>12)</sup>卷八十七山果類に桜桃の別名として鵝桃、含桃、荊桃があがっている。

〈\*12 桜桃〉の項も参照。

#### \*9 冬桃

モモの一種。フユモモ(冬桃)。漢名は旄、冬桃。『爾雅』<sup>73)</sup>に〈旄。冬桃子冬熟。<sup>(注62)</sup>とある。『和名抄』<sup>9)10)</sup>に冬桃の条があり<sup>71)</sup><sup>(注66)</sup>、和名は『箋注倭名類聚抄』<sup>10)</sup>(文政10年-1827)冬桃にあるようにフユモモ(不由毛々)。また、寒桃<sup>10)24)61)65)</sup>、霜桃<sup>9)10)60)</sup>、崑崙桃<sup>60)</sup>ともいう。霜にあたってから熟する桃の品種である。

#### \*10 榠桃

モモの一種。ケモモ(毛桃)といい、果実に毛のある桃の意である<sup>24)</sup>。『爾雅』<sup>73)</sup>釋木に〈榠桃。山桃〉とある<sup>72)</sup><sup>(注62)</sup>。山桃、山毛桃、野桃、花桃とも呼ぶ<sup>72)</sup>。榠桃はいわゆるモモ(桃)の原種であるが、『本草綱目』<sup>60)</sup>桃の条によると果肉が薄くて食えない。

#### \*11 侯桃(候桃とも書く)

モモの一種<sup>1)</sup>。和名は不詳。『淵鑑類函』<sup>78)</sup>(清康熙帝代1710年)果部桃に〈晉宮闕名曰、華林園桃七百三十八枝。白桃三株、侯桃三株〉と侯桃の語がある<sup>1)</sup>。

なお、『本草綱目』<sup>60)</sup>第三十四卷木部<sup>1)</sup>や『和漢三才図会』<sup>12)</sup>卷八十二 香木類辛夷にあるように、侯桃が辛夷(コブシ、ヤマアララギ)の別称に上げられるが<sup>1)24)</sup>、これは誤用とされる<sup>24)</sup>。

#### \*12 桜桃

モモの一種。シナミザクラ(支那実桜)<sup>24)70)</sup>。バラ科の落葉低木。〈\*8 荊桃〉に同じ。漢名は桜桃、楔、荊桃。また、含桃、鵝桃というが、含桃、鵝桃とは『呂氏春秋』<sup>79)</sup>高誘注によるとコウライウグイス(黄鶯)がこの実を口に含んで食うことからの名という<sup>(注67)</sup>。『爾雅』<sup>73)</sup>釋木に〈楔、荊桃。〔注〕今櫻桃。〉とあり<sup>(注62)</sup>、『本草綱目』<sup>60)</sup>果部第三十卷桜桃の釈名に〈鵝桃(禮注)含桃(月令)荊桃〉とある通りである。『和漢三才図会』<sup>12)</sup>山果類にも桜桃の別名として鵝桃、荊桃、含桃が挙げられている。

日本では桜桃をシナミザクラ(支那実桜)あるいは

## 食べ物の名数

シナオウトウ(支那桜桃<sup>11a</sup>)と呼んだ。また科皮木<sup>しなのかわのき</sup>、支那桜<sup>しな</sup>、実桜<sup>さくら</sup>、唐実桜<sup>みぎくらからみぎくら</sup>と呼んだ<sup>24</sup>。『本草和名』<sup>66</sup>桜桃に〈和名波々加乃美、一名加尔波佐久良乃美〉とあり<sup>(注65)</sup>、『医心方』<sup>40</sup>第十七巻 葉廿五種に〈櫻桃 和名加尔波佐久良乃三 又波々加乃三〉とあるように、桜桃の和名はハハカノミ(波々加乃美・波々加乃三)あるいはカニハサクラノミ(加尔波佐久良乃三)である。

なお、日本では『大和本草』<sup>11</sup>、『合類節用集』<sup>47</sup>(延宝8年-1680刊)、『和漢三才図会』<sup>12</sup>、『本草綱目啓蒙』<sup>61</sup>(<sup>注68</sup>)などを始め、桜桃にユスラ、ユスラウメと訓じることがあるが、これは誤りである(『大和本草』桜桃の白井校注<sup>11a</sup>)。また、近年、桜桃をセイヨウサクランボ、いわゆるサクランボの名にあてることがあるが、これも牧野<sup>70</sup>などがいうように誤りである。〈\*<sup>8</sup> 荊桃〉の項も参照のこと。

### \*13 胡桃・核桃

クルミ<sup>3</sup><sup>11</sup><sup>12</sup><sup>24</sup><sup>39</sup><sup>40</sup> クルミ科の落葉高木。漢名は胡桃<sup>24</sup><sup>61</sup><sup>60</sup><sup>76b</sup>、羌桃<sup>12</sup><sup>60</sup><sup>76b</sup>、核桃<sup>12</sup><sup>60</sup><sup>76b</sup>。『本草和名』<sup>66</sup>や『和名抄』<sup>9</sup><sup>10</sup>に胡桃の和名はクルミ(久留美)とある<sup>64</sup>(<sup>注69</sup>)。『延喜式』でも胡桃が貢出されている<sup>64</sup>。

### \*14 瓜

ウリ<sup>3</sup><sup>39</sup><sup>40</sup>。ウリ科の果実。瓜は<sup>ら</sup>蓏(草の実)に分類される<sup>5</sup>。和名はウリ(宇利)<sup>3</sup><sup>64</sup>。『本草和名』<sup>66</sup>第十八巻葉六十二種に〈白瓜子(中略)和名字利乃佐祢〉とある。『和名抄』<sup>9</sup><sup>10</sup>には種々の瓜が記載されている<sup>64</sup>。

### \*15 杏仁(アンニン)

アンズ(杏)の種子。〈\*<sup>21</sup> 杏〉の項を参照。

### \*16 榛の実

ハシバミ<sup>3</sup><sup>12</sup><sup>24</sup><sup>39</sup><sup>40</sup>の実。ハシバミはカバノキ科の落葉低木。漢名は榛<sup>24</sup><sup>60</sup><sup>61</sup>。『本草和名』<sup>66</sup>や『和名抄』<sup>9</sup><sup>10</sup>に和名はハシバミ(波之波美)とある(<sup>注70</sup>)。

### \*17 菱

ヒシ<sup>3</sup><sup>11</sup><sup>12</sup><sup>24</sup><sup>61</sup><sup>62</sup>の実。ヒシ科の一年生水草。漢名は菱実、菱、水栗、沙角など<sup>12</sup><sup>60</sup><sup>61</sup>。『本草和名』<sup>66</sup>や『和名抄』<sup>9</sup><sup>10</sup>に和名はヒシ(比之)とある(<sup>注71</sup>)。奈良時代にも『万葉集』や『延喜式』に見るようにヒシは食用とした<sup>64</sup>。

### \*18 林檎子

リンゴ<sup>3</sup><sup>12</sup><sup>24</sup><sup>65</sup>。ワリngo(和林檎) *Malus asiatica*<sup>65</sup><sup>70</sup>。バラ科の落葉高木。漢名は林檎<sup>24</sup><sup>60</sup><sup>61</sup>。『和名抄』<sup>9</sup><sup>10</sup>に林檎子の和名はリウゴウ(利宇古字)とある(<sup>注72</sup>)。リンゴはリウゴウの転。即ち林檎の字音の転である<sup>3</sup>。『本草綱目啓蒙』<sup>61</sup>巻二十六果部に、〈林檎

リウゴウ和名鈔 リンゴ アヲリンゴ加州〉とある。リンゴ(林檎)には、江戸時代までりんごと呼ばれてきたのは古く中国から渡来し在来種とされるワリngo(ジリンゴ)<sup>70</sup>である。現在一般にりんごと呼ばれているものは、明治以降日本でも栽培・食用されるようになったセイヨウリンゴ(西洋林檎) *M. pumila* の *Malus asiatica* である<sup>65</sup>。林檎はワリngo(ジリンゴ)<sup>70</sup>にあたり、<sup>だい・ない</sup>奈がセイヨウリンゴと同種にあたる<sup>12a</sup><sup>60c</sup>。〈\*<sup>30</sup> <sup>だい・ない</sup>奈〉の項参照。

### \*19 山査子

サンザシ<sup>12</sup><sup>61</sup><sup>65</sup>。バラ科サンザシ属の落葉低木。漢名は山楂子<sup>60</sup><sup>61</sup>。『本草綱目』<sup>60</sup>果部山楂は、「世間一般に山楂を山査と書くのは誤りである。」と記す。『和漢三才図会』<sup>12</sup>巻第八十七山果類山楂子も同書を引く。

### \*20 李

スモモ<sup>3</sup><sup>12</sup><sup>24</sup><sup>39</sup><sup>40</sup><sup>65</sup><sup>70</sup>(<sup>注73</sup>)。バラ科の落葉小高木。漢名は李<sup>24</sup><sup>60</sup><sup>61</sup>。『本草和名』<sup>66</sup>や『和名抄』<sup>9</sup><sup>10</sup>に和名スモモ(須毛々)とある<sup>64</sup>。

### \*21 杏

カラモモ<sup>3</sup><sup>11</sup><sup>12</sup><sup>39</sup><sup>40</sup>。アンズ<sup>3</sup><sup>11</sup><sup>12</sup><sup>24</sup><sup>65</sup>。バラ科の落葉小高木。漢名は杏<sup>24</sup><sup>60</sup><sup>61</sup>。『本草和名』<sup>66</sup>や『和名抄』<sup>9</sup><sup>10</sup>によると杏の古和名はカラモモ(加良毛々)<sup>(注74)</sup>。唐桃の意である<sup>3</sup>。アンズは杏子の漢音よりいう<sup>3</sup><sup>24</sup>。種を杏仁(アンニン)という<sup>12</sup>。

### \*22 栗

クリ<sup>3</sup><sup>12</sup><sup>24</sup><sup>39</sup><sup>40</sup>。ブナ科の落葉高木。漢名は栗<sup>24</sup><sup>60</sup><sup>61</sup>。『本草和名』<sup>66</sup>や『和名抄』<sup>9</sup><sup>10</sup>に和名はクリ(久利)とある<sup>3</sup><sup>64</sup>(<sup>注75</sup>)。古くから食され、『常陸風土記』、『出雲風土記』、『延喜式』に栗が見られる<sup>64</sup>。栗には生栗・干栗・搗栗の区別があった<sup>64</sup>。搗栗は搗ち栗と同じ<sup>16</sup>。搗栗(搗ち栗)は栗の実を殻のまま干して、軽く煎って臼で搗き、殻と渋皮とを取ったもの。

### \*23 柑

コウジというミカン(蜜柑)類の一種<sup>24</sup>。ミカン科の常緑低木。カムシ<sup>3</sup><sup>39</sup><sup>40</sup><sup>65</sup>。カウジ(コウジ)(柑子)<sup>12</sup><sup>24</sup>。ミカン<sup>61</sup>。漢名は柑<sup>24</sup><sup>60</sup><sup>61</sup>、木奴<sup>60</sup><sup>72</sup>。別漢名に金実<sup>72</sup>、木奴<sup>72</sup>がある。平安時代の『本草和名』<sup>66</sup>や『和名抄』<sup>9</sup><sup>10</sup>は柑子の和名をカムシ(加牟之、加無之)と記す<sup>3</sup>(<sup>注76</sup>)。別に柑子、柑子<sup>72</sup>、柑子橘、橘子蜜柑、蜜柑柑子ともいう<sup>24</sup>。

『延喜式』にも柑子の貢出が見られるように、日本でも古くから栽培されてきた<sup>64</sup>。『続日本紀』<sup>80</sup>(延暦16年-797)聖武天皇神亀2年(725年)11月の条に佐味虫麻呂が唐から柑子を持ち帰り、播磨直弟兄が実

を实らせたので二人に位を授けた記録がある<sup>64)68)</sup>(<sup>注77)</sup>。甘子は甘い実の意で、柑子と同じである。

『大和本草』<sup>11)</sup>は柑にクネンボ(九年母)に当てるが、『本草綱目啓蒙』<sup>61)</sup>のように柑子はミカン類の総称と考えるのがよい<sup>3)12)</sup>。

#### \*24 橘

タチバナ<sup>3)11)24)39)40)65)</sup>。ミカン科の常緑低木。漢名は橘<sup>24)60)61)</sup>。別漢名に黄橘<sup>12)72)</sup>、朱橘<sup>12)72)</sup>。『和名抄』<sup>9)10)</sup>は橘をキツ、タチバナ(太知波奈)とよんでゐる<sup>16)64)</sup>(<sup>注78)</sup>。

記紀万葉にもタチバナが登場するが、『古事記傳』<sup>81)</sup>(天明5~8年-1785~88)なども考察するように、現在のどの植物に当たるのかについてははっきりしない。ニッポンタチバナ<sup>70)</sup>あるいはヤマトタチバナ<sup>82)</sup>と呼ばれる在来種 *Citrus tachibana* であるとする説、キシウミカン(紀州蜜柑) *Citrus kinokuni* と呼ばれる中国原産のコミカンとする説などがある<sup>64)83)</sup>。おそらくタチバナと呼ばれる植物には数種があり、橘の用語とともに混同されていると考えてよさそう。

白井光太郎『植物渡来考』<sup>65)</sup>によると、『大和本草』<sup>11)</sup>は橘を渡来ミカンとし(<sup>注79)</sup>、『和漢三才図会』<sup>12)</sup>(<sup>注80)</sup>、『本草綱目啓蒙』<sup>61)</sup>(<sup>注81)</sup>や『本草図譜』<sup>63)</sup>(文政11年-1828)などは橘はコウジ類の総名で、日本に自生するタチバナとしている。

『本朝食鑑』<sup>62)</sup>(元禄10年-1697)は蜜柑の釈名に橘と香果を挙げ、集解に「蜜柑とは、すなわち橘のことである。南国に多く産する。」と記し、渡來說である。

『牧野 新日本植物圖鑑』<sup>70)</sup>は、ミカン科のなかでキシウミカン(コミカン・ホンミカン)とニッポンタチバナ(タチバナ)とを分けて記し、昔のタチバナの系統を引いたものは、現在のコミカン(小蜜柑)(ホンミカン)、キシウミカン(紀州蜜柑)のことであること<sup>83)</sup>、現在タチバナと呼ぶものはニッポンタチバナ(タチバナ)であり、京都御所の紫宸殿の南階下の西側にある「右近の橘」はニッポンタチバナ(タチバナ)の栽培品種で<sup>16)</sup>、果実は野生品より大きいことを記す。また、「従来このタチバナに橘の字を当てたのは誤りである。」と記す。

北村<sup>82)</sup>もタチバナ(ヤマトタチバナ)の項で「京都御所の紫宸殿の「右近の橘」は本種の栽培品種で果実は野生品より大きい」と記す。

また北村<sup>63b)82)</sup>は、ミカン属の説明で、中国の橘はキシウミカンかまたはこれに近いものとし、キシウミ

カン(コミカン)にあたるものは中国の浙江省及び長江一体に広く栽培されているとする。キシウミカン(コミカン)古く日本に伝わったらしい<sup>83)</sup>(<sup>注82)</sup>。

『日本書紀』<sup>82)84)</sup>(養老4年-720)にはタチバナ伝来を推測させる記述があり(<sup>注83)</sup>、『古事記』<sup>85)</sup>(和銅5年-712)にも同じ話がある<sup>16)71)</sup>(<sup>注84)</sup>。本居宣長による注釈書『古事記傳』<sup>81)</sup>では、田道間守が常世国から求めてきた花であるからタヂマバナと呼び、マが省略されてタチバナと呼ぶようになったとする説を挙げている(<sup>注85)</sup>。

『万葉集』<sup>67)</sup>(天平宝字4年-760頃か)には大伴家持「橘の歌一首併せて短歌」をはじめとして68首の橘の歌が詠まれているが、多くは花や香りを歌い<sup>68)</sup>、「果実は珠に貫く(薬草を玉にして邪気を払うまじない)」などに取り上げられるが、食用にはまったく触れられていない。

在来種のニッポンタチバナ<sup>24)70)</sup>(ヤマトタチバナともいう)は酸っぱくて食用にはならない<sup>70)86)</sup>。このため、「橘」は奈良時代には薬用が主体で食用ではなかったとする説もあるが、記紀の田道間守が常世国から持ち帰ったものは食用のようであるし、『続日本紀』<sup>80)</sup>天平8年(736年)十一月戊寅<sup>71)64)</sup>の条に「勅曰、橘者果子之長、人之所好柯」と「橘」の味を賞賛している(<sup>注86)68)</sup>ことから、また、『常陸国風土記』香島郡の条<sup>64)</sup>、『延喜式』<sup>69)</sup>の記載<sup>64)</sup>や正倉院文書中の諸例<sup>64)</sup>からみても奈良時代には「橘」を栽培し食用としていたとみてよい<sup>64)68)</sup>。このように見てくると、『風土記』や『延喜式』に挙げられる「橘」は渡来種のキシウミカン(コミカン・ホンミカン)であろうか。

さて記紀の田道間守が常世国から持ち帰ったものは上述したようにキシウミカン(コミカン・ホンミカン)とする説が多いが、他説もある。園芸学者田中長三郎はダイダイ(橙)とする説であり<sup>83)</sup>、『牧野 新日本植物圖鑑』<sup>70)</sup>はクネンボ(九年母)の漢名に橘を挙げる。『和漢三才図会』<sup>12)</sup>は「今単純にタチバナ(太知波奈)といっているものは包橘である」とする。『本草綱目啓蒙』<sup>61)</sup>は「包橘ハ今春盤二用ユル カウジナリ」とし、『本草図譜』<sup>63)</sup>も包橘をかうじ(こうじ)とする。

#### \*25 柿

カキ<sup>3)12)24)39)40)</sup>。カキノキ科の落葉高木。漢名は柿<sup>24)60)61)</sup>。現代は柿の字をよく用いるが、柿は俗字で正しくない<sup>12)</sup>。『本草和名』<sup>66)</sup>や『和名抄』<sup>9)10)</sup>に柿の和名はカキ(加岐)とある<sup>3)64)</sup>(<sup>注87)</sup>。カキは赤き樹の意<sup>3)68)</sup>。縄文時代から食用にされていたとされるが、『万葉集』には詠まれていない<sup>68)</sup>。『延喜式』には栽培例が見られる<sup>64)</sup>。



(注：柿の字について『大漢和辞典』<sup>1)</sup>をみると、柿（大漢和辞典 6-14681）は柿（6-14596）の俗字、柿（大漢和辞典 6-14596）は柿（大漢和辞典 6-14595）の俗字、柿（大漢和辞典 6-14680）も柿（大漢和辞典 6-14595）の俗字とある。『合類節用集』<sup>47)</sup>巻四にも〈柿<sup>又作柿<sup>フ</sup>、俗<sup>フ</sup>柿<sup>フ</sup>、非柿者木片也</sup>〉とある。)

\*27 栢・榧

カヘ<sup>3)</sup><sup>24)</sup>。カヤ<sup>ひ</sup>（榧）。イチイ科の常緑針葉高木。カヘは榧の古名<sup>24)</sup>。榧は今はカヤと読む<sup>62)</sup>。

榧については『出雲国風土記』<sup>87)</sup>（天平5年-733）意宇郡凡諸山野所在草木の条に〈栢<sup>榧</sup>或作<sup>イ</sup>榧〉とあり、『出雲国風土記』<sup>87)</sup>神門郡凡諸山野所在草木の条に〈榧〉があり<sup>64)</sup>、『出雲国風土記』<sup>87)</sup>仁田郡凡諸山野所在草木の条に〈栢〉がある。さらに『常陸国風土記』<sup>87)</sup>（養老5年-721）久慈郡の条に、榧（栢）は山の珍味として榧の実などとともに好まれ食用としたことが記されている<sup>64)</sup><sup>82)</sup>（注88）。

榧の種子は古くから薬用とし<sup>12)</sup><sup>62)</sup><sup>82)</sup>、油を搾って榧油として食用、理髪用、灯火用に用いたようである<sup>64)</sup><sup>82)</sup>。榧の利用法として、『和漢三才図会』<sup>12a)</sup>夷果類榧の条には榧油が記載され、『本朝食鑑』<sup>62)</sup>穀部之二醸造類や同書<sup>62)</sup>菜部榧子の条には榧酒が記載されている。

榧子の和名については、『本草和名』<sup>66)</sup>下巻 第十四巻木下四十五種に

榧實 一名彼子一名披核 <sup>已上二名出蘇歌注</sup> 和名加倍乃美とあり、榧實の和名をカヘノミ（加倍乃美）とする。『十巻本 和名抄』<sup>9)</sup><sup>10)</sup>巻九 果部 果部類にも

榧子 本草云、栢實、上音百、一名榧子、上音匪、加閉<sup>10)</sup>

とあり、榧子の和名をカヘ（加閉）とする。『医心方』<sup>39)</sup><sup>40)</sup>にも榧実の和名にカヘノミ（加倍乃美）とある。『当流献方口伝書』<sup>51)</sup>では榧子を五菓（栗・柿・榧・桃・梨）の中に入れている<sup>50)</sup>。

中国でもカヘ（カヤ）を意味するものは榧である。ただし、中国の榧はシナガヤ *Torreya grandis* であり<sup>72)</sup>、日本のカヤ（ニホンカヤ *Torreya nucifera*）<sup>70)</sup><sup>82)</sup>と異種であるので注意を要する<sup>70)</sup>。

ところで、現在我々は「栢」をカヤと読んでいる。この読みは『本草和名』<sup>66)</sup>や『和名抄』<sup>9)</sup><sup>10)</sup>が榧の一名に栢を挙げたことによるが、実は「栢」をカヤと読むことは誤りである。以下にまとめる。

『本草和名』<sup>66)</sup>は〈栢實子 一名堅剛一名掬 和名比乃美一名加倍乃美〉と、栢実子の和名をヒノミ（比乃美）、カヘノミ（加倍乃美）としており<sup>89)</sup>、『十巻本

和名抄』<sup>9)</sup><sup>10)</sup>も榧子の一名に栢實を挙げ、和名をカヘ（加閉）とする一方で、〈栢 兼名苑云、栢、音百、一名栢、音菊、加閉〉と栢の和名にもカヘ（加閉）を当てている<sup>89)</sup><sup>3)</sup><sup>10)</sup><sup>61)</sup>。両書は栢をヒノキの類あるいはカヤの類としていることになる。しかしながら、『正字通』<sup>6)</sup>辰集 中集 木部に〈栢、俗栢字。〉<sup>1)</sup>とあるように、栢と栢は同字であるから、栢は栢であり、側栢（ヒノキ科のコノテガシワ）である。従って『本草和名』<sup>66)</sup>が栢の実の和名にカヘノミ（加倍乃美）を当てたこと<sup>89)</sup>や同書に倣って『和名抄』<sup>9)</sup><sup>10)</sup>が榧子の一名に栢實を当てたこと<sup>89)</sup>は誤りである。

両書の誤りについては『和漢三才図会』<sup>12)</sup>（注91）（注92）、『東雅』<sup>3)</sup>、『和名抄』の注釈書である『箋注倭名類聚抄』<sup>10)</sup>（注93）、『本朝食鑑』<sup>62)</sup>などが指摘している。しかしながら、『下学集（室町末期書写本）』<sup>74)</sup>（注94）や『元和本 下学集』<sup>49)</sup><sup>75)</sup>（元和3年-1617）に〈榧栢二字義同〉<sup>95)</sup><sup>16)</sup>とあり、『弘治二年本 節用集』<sup>88)</sup>（弘治2年-1556）加部に〈栢<sup>栢</sup>榧〉とあるように、和書では栢や栢を榧（イチイ科のカヤ）の意で用いていることも多いので、注意を要する。後世の『多識編』<sup>76)</sup>（慶長17年-1612）<sup>96)</sup>や『合類節用集』<sup>47)</sup>（延宝8年-1680）<sup>97)</sup>になると栢（栢）と榧とを区別している。

『江家次第』<sup>15)</sup>東宮御元服の条では栢実を松の実・栢榴・棗とともに木菓子<sup>注12)</sup>に入れているが<sup>54)</sup>、後世の『厨事類記』<sup>17)</sup>では、栢実は松の実・栢榴・干し棗とともに干菓子の一つとされており、木菓子（栗・柿・杏・李・柑子・桃・彌猴桃・柿など）と区別されている。栢実は松の実と同様に炒って盛っている<sup>18)</sup>（注14）。さらに『厨事類記』<sup>17)</sup>には「栢がない時は粉餅のように作って、サツクラ（甘葛煎か）を入れて炒って刀で上面をこそいで盛る。」とある<sup>4)</sup><sup>18)</sup>（注14）。これらの書の栢実、栢実も側栢（ヒノキ科のコノテガシワ）ではなく、榧（イチイ科のカヤ）であろう。

（〈\*28 栢子〉の項参照）

\*28 栢子

栢の実。ここではカヤの実（榧子）を指している。

栢は本来、扁栢（ヒノキ）、側栢（コノテガシワ）、羅漢栢（アスナロ）あるいは花栢（サワラ）の類とされ<sup>16)</sup>、なかでもヒノキ科の常緑低木のコノテガシワ（側栢）<sup>61)</sup><sup>62)</sup><sup>65)</sup><sup>70)</sup>とするのが通説である<sup>96)</sup>（注98）。栢の漢名は側栢<sup>12)</sup><sup>61)</sup>。コノテガシワ（側栢）の実を栢子（栢実）という。また、種仁は栢仁（栢子仁）<sup>12)</sup><sup>61)</sup>といい、漢方薬とする（『中葉大辞典』<sup>72)</sup>、『原色和漢薬図鑑』<sup>89)</sup>など）。

「柏」の字は、『正字通』<sup>6)</sup>辰集 中集木部に〈栢、俗栢字。〉とあるように<sup>1)</sup>、「栢」と同義である。また、『説文解字注』<sup>5)</sup>第六篇上木部を見ると、〈栢、鞠也、從木白聲〉とある<sup>1)</sup>。さらに『爾雅』<sup>73)</sup>釋木<sup>(注99)</sup>、『本草綱目』<sup>60)</sup>木部栢<sup>(注100)</sup>や『初學記』<sup>90)</sup>(唐代728年)果木部栢の条<sup>(注101)</sup>などの記載を見ても、栢は一名きく栢といい、側栢である。

しかしながら、〈\*27 栢〉の項で述べたように、『本草和名』<sup>66)</sup>及び『和名抄』<sup>9)10)</sup>両書が栢の和名をカヘ(加閑)とし、カヤ(榧)の類と誤ったこと、また、栢が栢と同義であることから、和書では栢子(栢実)を栢子(栢実)の意で用い、カヤの実(カヘノミ)(榧子)を指している場合がある。本項⑤中の諸書に挙げられている栢・栢<sup>(注12)(注14)(注31)(注48)</sup>もカヤの実(カヘノミ)であろう。

さらにややこしいことに、現在、栢を「かしわ」と読んで、ブナ科落葉高木のカシワ(榲, カシワギ, モチガシワ)<sup>61)70)</sup>に当てたり<sup>86)91)92)</sup>、同じくブナ科のコナラ(小櫟, ナラ, ホウソウ)<sup>70)</sup>などに当てることがある<sup>86)</sup>。これは『和名抄』<sup>9)10)</sup>が榲こくの和名をカシワ(可之波)とし、榲こくの一名に栢を挙げたことによるが<sup>(注102)</sup>、栢を広葉樹の「かしわ」とすることは誤りである<sup>62)</sup>(『花と木の漢字学』<sup>91)</sup>、『日本人と植物』<sup>92)</sup>など参照)。前述したように栢は栢と同義であり、中国ではブナ科のカシワこくは榲樹<sup>72)</sup>であって、栢とはいわないのである<sup>86)</sup>。

なお、『万葉集』に載る「このてがしわ(児手栢)」が何かについても議論があり、ヒノキ科の常緑低木コノテガシワ(側栢)とする説(『本草綱目啓蒙』<sup>(注98)</sup>など参照)の他、コノテガシワは元文年間(1736-1740)に伝わった物だから<sup>82)</sup>、古代の「このてがしわ」はブナ科の落葉高木コナラ(櫟)の若葉であるとする説(『大和本草』巻之十一(薬木)側栢の白井校注<sup>11a)</sup>参照)などがあるが、ここでは触れない。

#### \*29 榲しよ

本文中で述べたように「杼」は「柿(柿)」の字の誤写かもしれないが、杼ならブナ科の落葉高木のクヌギ(櫟)である。『和名抄』<sup>9)10)</sup>に

杼 尔雅集注云、榲しよ、音羽、亦香羽反、一名杼、音杵、又當旅反、與茅同、度知、莊子狙公賦曰杼是、とあり、杼・榲の和名をトチ(度知)<sup>3)</sup>とする。このことから、『和漢三才図会』<sup>12)</sup>などのように杼をトチ(榲)(トチノキ科の落葉高木)とする書もあるが、『本草綱目』<sup>60)</sup>橡実にあるように、茅(杼と同じ)は一名榲と

いい、橡実、橡斗、櫟れききゆうと同種であり、クヌギ(櫟)(ブナ科の落葉高木)である。『箋注倭名類聚抄』<sup>10)</sup>も「杼」を「櫟」とする。クヌギの実は渋味が強いので、そのままでは食用とはならない。一方、『常陸国風土記』<sup>87)</sup>久慈郡の条には「櫟」は山の珍味として椎の実や榧などとともに食用としたことが記されている<sup>64)(注88)</sup>。日本では「櫟」をクヌギの他に、イチイ(一位)(イチイ科イチイ属の針葉樹)<sup>9)10)</sup>にも当てるので『常陸国風土記』の「櫟」はクヌギではなくイチイの実であったと思われる<sup>64)</sup>。

#### \*30 奈だいな

アカリango(赤林檎)<sup>16)61)65)</sup>。バラ科の落葉高木。オオリングゴ<sup>60c)</sup>、カラナシ<sup>3)</sup>ともいう。現在食用とするセイヨウリングゴ *M. pumila* と同種<sup>12a)60c)</sup>である。

奈は棕、奈とも書くが、棕は俗字、奈は偽字とされる<sup>39)</sup>。漢名は蘋果(苹果)、奈<sup>12)</sup>。『本草和名』<sup>66)(注103)</sup>、『和名抄』<sup>9)10)(注104)</sup>及び『医心方』<sup>39)40)(注105)</sup>によると和名はナイ(奈以)。また、『本草和名』<sup>66)</sup>にはフナエ(布奈江)の名、『新撰字鏡』<sup>93)</sup>(昌泰元年-898~延喜元年-901年頃)<sup>(注106)</sup>や『和名抄』<sup>9)10)(注104)</sup>にはカラナシ(加良奈之)の名もある。カラナシとは韓梨<sup>3)</sup>・唐梨の意である。奈は平安時代には中国から渡来したようである。

時代が下がって『書言字考節用集』<sup>48)</sup>(享保2年-1717年)六にも「奈 カラナシ 林檎之別種」とある<sup>16)</sup>。『大和本草』<sup>11)</sup>によると別名リンキン、『本草綱目啓蒙』<sup>61)</sup>によると別名ナイ、リンキン、アカリango、ベニリングゴ、ベニココ、リンキ<sup>(注107)</sup>。7、8月に熟し、味は甘酸で多少渋味がある。『大和本草』<sup>11)</sup>や『本草綱目啓蒙』<sup>61)</sup>によると、奈は薄く切って日に干し菓子にする。

なお、カリめいさン(榲榲)\*35の古名にもカラナシがあり<sup>(注108)</sup>、奈の字もあててゐるが<sup>82a)</sup>、榲榲は奈とは別種である。

#### \*31 椰子

ヤシ。ヤシホ<sup>65)</sup>。ヤシ科の植物。漢名は椰子<sup>60)</sup>。日本の古書で椰子を果子とする例や料理の素材とする記載はまずない。

#### \*32 橙子

クネンボ<sup>24)61)63)</sup>。ミカン科の常緑低木。『本草和名』<sup>66)</sup>及び『和名抄』<sup>9)10)</sup>に和名アベタチバナとある<sup>(注109)(注110)</sup>。『本草綱目啓蒙』<sup>61)</sup>はクネンボ。『和漢三才図会』<sup>12)</sup>はダイダイ、カブス。『東雅』<sup>3)</sup>は『和名抄』を引いてアヘタチバナ。『合類節用集』<sup>47)</sup>卷四はカブ

ス、ダイダイ。

\*33 鵲梨

ナシの一種。バラ科の落葉高木。『和漢三才図会』<sup>12)</sup> 卷第八十七山果類梨の条によると〈鵲梨〔一名は綿梨〕皮は薄くて汁が多い。味はやや劣る。〉<sup>12a)</sup>。

\*34 乳梨

ナシの一種。バラ科の落葉高木。『和漢三才図会』<sup>12)</sup> 卷第八十七山果類梨の条によると〈乳梨〔一名は雪梨〕皮は厚く肉は充実している。味は極めて良い。〉<sup>12a)</sup>。

\*35 榎楮

カリン<sup>12)24)61)</sup>。バラ科の落葉高木。榎楮の名は『延喜式』<sup>69)</sup>にも見られる<sup>(注108)</sup>。別名キボケ<sup>61)</sup>。

なお、〈<sup>30)</sup>奈〉の項でも述べたように、カリン(榎楮)の古名にカラナシがあり<sup>(注108)</sup>、奈の字もあて<sup>る</sup><sup>24)</sup>、奈は榎楮とは別種である。

\*36 花木瓜

クサボケ<sup>61)</sup>。コボケ<sup>12)</sup>。バラ科の落葉低木。漢名榎子<sup>11)24)61)</sup>。別名にボケ、ノボケ、コボケ、クサボケ、シドミなど<sup>61)</sup>。『延喜式』<sup>69)</sup> 卷第三十七典藥寮諸国進年料雑葉の大和国卅八種に〈白花木瓜實卅三斤〉、同書近江国七十三種に〈白花木瓜實十斤〉と花木瓜の語がある<sup>14)24)</sup>。

\*37 楊梅

ヤマモモ<sup>3)11)12)24)70)</sup>。ヤマモモ科の常緑高木。山桜桃<sup>66)</sup>とも。漢名は楊梅<sup>24)60)61)</sup>。『本草和名』<sup>66)</sup> 山櫻桃に和名ヤマモモ(也末毛々)とあり<sup>(注111)</sup>、『和名抄』<sup>9)10)</sup> 楊梅に和名はヤマモモ(夜末毛々)とある<sup>64)</sup><sup>(注112)</sup>。『和名抄』<sup>9)10)</sup>に〈山櫻桃有<sup>二</sup>種<sup>一</sup>〉とあるように、古くはヤマモモ(山桃)と呼ばれるものには楊梅と山桜桃の二種があった。しかし、次第にヤマモモの語は「楊梅」にのみあてられるようになった<sup>16)</sup>。『延喜式』には山桃子と楊梅の語の両方が見られる<sup>64)</sup>。また、『古事記』、『日本書記』あるいは『万葉集』などに出てくるモモ(毛毛)の多くはヤマモモ(楊梅)のことという<sup>68)</sup>。その後、平安時代になると、甘みの強いケモモ(毛桃)がモモの主流となり、単にモモといえはケモモ(毛桃)を称するようになった。〈<sup>5)</sup>桃〉の項の牧野の説<sup>70)</sup>参照。

\*38 銀杏

イチヨウウ<sup>11)12)24)65)</sup>。イチヨウ科の落葉高木イチヨウ(公孫樹)の実。ざんなん。漢名は銀杏、白果、鴨脚子<sup>12)24)60)61)</sup>。『本朝食鑑』<sup>62)</sup> 銀杏に〈薄い皮を去って、炒って食べた、あるいは羹に入れて厨供の用とする。〉<sup>62a)</sup>とあるが、同書の島田の注<sup>62a)</sup>によると「江家

次第」<sup>15)</sup>や『厨事類記』<sup>17)</sup>などの公家の食礼物にはギンナンを果子する例や料理の素材とする例はない。

\*39 葡萄

ブドウ<sup>11)12)24)61)62)</sup>。ブドウ科の蔓性落葉植物。漢名は葡萄、蒲桃、蒲陶<sup>24)</sup>。和名はエビカズラ(衣比加豆良・衣比加都良)<sup>11)12)24)61)62)</sup>。『本草綱目啓蒙』<sup>61)</sup> 葡萄に〈エビ古名、エビカヅラ、オホエビ共同上、ブドウ〉とある。『本草和名』紫葛や『和名抄』<sup>9)10)</sup> 紫葛に和名はエビカズラノミ(衣比加豆良乃実・衣比加都良)とある<sup>3)</sup><sup>(注113)</sup>。ただし、紫葛をブドウに当てるのは誤りとされる<sup>24)</sup>。

【注その2】(注：アンダーラインは著者による。)

(注1)『字通』<sup>2)</sup>

果<sup>カ(クワ)カン(クワン)</sup>  
このみ はたす はて

【象形】木上に果実のある形。[説文]六上に「木実なり。木に従ひ、果の形の木上に在るに象る」とあり、全体を象形とする。

① このみ、くだもの。② 花よりして実り、結実するので、はたす、はて、結果の意となる。

(中略)

【古訓】〔和名抄〕果 日本紀私記に云ふ、古能美(このみ)、俗に久多毛乃(くだもの)と云ふ。〔名義抄〕果 コノミ・クダモノ・ハタス・トグ・トゲヌ [字鏡集] 果 コノミ・クダモノ・ハタス・サダム・ノブ・ナル・トゲヌ・ヨシ・アラハス

(注2)『訓読 説文解字注』<sup>5a)</sup> 第六篇上 木部

果 木實也、従木、象果形在木之上、

果 果は木実也。木に従ひ、果の形木上に在るに象る、

(注3)『字通』<sup>2)</sup>

菓<sup>カ(クワ)カシ</sup>  
このみ

【形声】声符は果。果は果実で、菓の初文。菓子はもと果物を意味した。

① このみ、くだもの。② かし。もと果物を砂糖漬けにした。

【古訓】〔名義抄〕菓 クダモノ・コノミ

(注4)『集韻』<sup>7)</sup> 卷之六 上聲下 果第三十四

果菓、古火切、説文、木實也、从木、象果形在木之上、或作菓、文十九

(注5)『正字通』<sup>6)</sup> 申集 上集九 艸部八

菓、俗果字

(注6)『訓読 説文解字注』<sup>5a)</sup> 第一篇下 艸部

藟 在木曰果、在地曰藟 从艸

藟 木に在るを果と曰ひ、地に在るを藟と曰ふ。艸・  
藟に从ふ、

(注7)『漢書』<sup>8)</sup>卷二十四 食貨志第四上<sup>1)</sup>

菜茹有畦，瓜瓠果藟。〔注〕應劭曰、木實<sup>7)</sup>曰果、草實<sup>7)</sup>曰藟。張晏曰、有<sup>レ</sup>核曰果、無<sup>レ</sup>核曰藟。臣瓚曰、案<sup>7)</sup>木<sup>7)</sup>上<sup>7)</sup>曰果、地<sup>7)</sup>上<sup>7)</sup>曰藟也。師古曰、茹<sup>7)</sup>、所<sup>7)</sup>食之菜也。畦<sup>7)</sup>、區也。茹<sup>7)</sup>音人豫反。畦<sup>7)</sup>音胡圭反。藟<sup>7)</sup>音來果反。殖於疆易。<sup>8a)</sup>  
(訳：畦をつくって菜茹をつくり、瓜・瓠・果・藟は疆易に植えて殖やす。)

(注8)『十卷本 倭名類聚抄』<sup>9)</sup>第九 果藟類

果藟 唐韵云、説文、木上曰果、古火反字亦作菓。日本紀私記云、古能美、俗云久多毛乃。地上曰藟力果反、久佐久太毛能。張晏曰、有<sup>レ</sup>核曰菓、無<sup>レ</sup>核曰藟、核見菓。藟具<sup>7)</sup>、應劭曰、木實曰菓、草實曰藟

(注：「張晏曰」は漢書食貨志の注。)

(注9)『大和本草』<sup>11)</sup>卷之十 木之上漆

○果木 説文云 在<sup>7)</sup>木<sup>7)</sup>曰果、在<sup>7)</sup>草<sup>7)</sup>曰藟

(注10)『和漢三才図会』<sup>12)</sup>卷第八十六 果部

『説文』によれば、木の上になるものを果〔菓と同じ。和名は古乃美。俗に久太毛乃という〕といい、地上でなるものを藟〔和名は久佐久太毛能〕という、とある。

『漢書』の注では、「核のあるものを菓といい、核のないものを藟という」とあり、また「木の実を菓といい、草の実を藟とい」(食貨志上)ともある。

一般に、乾して脯(干果)とし、豊作のときでも凶作のときでも、間食として用いることができ、また病気のときは菓として用いられ、粒食の補助として民の生活にしますのである。

五果は五味・五色があつて五臓に應じる。占書には、五穀の収穫の多寡を知りたければ、五果の出来ぐあいを看ればよい。五果とは李・杏・桃・栗・棗である。占書には、李は〔小豆の収穫の多寡を主どる〕、杏は〔大麦を主どる〕、桃は〔小麦を主どる〕、栗は〔稲を主どる〕、棗は〔禾を主どる〕、とある。

『本草綱目』は、草木の実で果・藟と称されるものを集めて果部とし、これを六類に分けている。それは、五果・夷果・味果・藟・水藟である。<sup>12a) 16)</sup>

(注11)『類聚雜要抄』<sup>13)</sup>卷一の鳥羽天皇永久四年正月二十三日に内大臣藤原忠通が東三条殿において行った母屋大饗の饗応差図をみると、尊者(正賓)の分は、四脚の台盤に三十三皿の銀盤(銀皿)を並べているが、このうちには梨子、干棗、小柑子、獼猴桃の四皿、饌饌、饌饌、饌饌、饌饌の四皿があり、木菓子と唐菓子とを区別している。陪席の公卿たちの食卓にも柑子、棗、梨子の木菓子の皿、饌饌、饌饌の唐菓子の皿があり、また、〈唐菓子。并木菓子之盤ハ四寸五分也〉の記述もあるなど<sup>16)</sup>、やはり木菓子と唐菓子とを区別している<sup>4)</sup>。

(注12)『江家次第』<sup>15)</sup>卷十七 五 東宮御元服

并<sup>7)</sup>木菓子四杯<sup>7)</sup>、松實柏實石榴棗<sup>7)</sup>唐菓子(略)並以朱漆盤盛之

(注：『本朝食鑑2』<sup>62a)</sup>榧子の条の島田勇雄の訳注及び『和菓子の系譜』<sup>4)</sup>に引かれる。)

(注13)『和漢三才図会』<sup>12a)</sup>卷第一百五 造釀類

果子

△思うに、餠・捻頭といった類を、みな果子という。その意は桃・李・杏・柑の右に並ぶものだからである。『説郛』市肆記にも餠餅の類を果子の部に入れているが、同じ意味からである。そもそも下等品の果子を造るときは、麴をやや腐熟させて造る。また棉実の灰汁を煎って膏にしてそれを少しばかり麴の中にまぜる〔その味はやや辛、温で、小毒あり〕。そうしなければ熱してもふくれて大きくならないからである。黒沙糖とか膠飴を沙糖の代りに用いるが、いずれも物の利用を考えてそうするのである。上等品の果子でもみな糯・麴を熬つてつくる。それで食べると咽はかわき、多食すると下痢をする。味は甘くて痘病の基になる。小児や病人にはよくない。まして賤果子においてはなおさらのことである。

(注14)『厨事類記』<sup>17)</sup>第□ 調備部。

干菓子。

松實。柏實。石榴。干棗。

或有<sup>7)</sup>供<sup>7)</sup>五菓之例<sup>7)</sup>。相<sup>7)</sup>加<sup>7)</sup>搔栗一坏<sup>7)</sup>。或用<sup>7)</sup>時菓子<sup>7)</sup>。

木菓子。

栗。橘。杏。李。柑子。桃。獼猴桃。柿等用<sup>7)</sup>之。時美菓四坏供<sup>7)</sup>之。御移徒五菓。陰陽寮注申。李。東方。杏。西方。棗。中央。桃。西方。栗。北方。若無<sup>7)</sup>之者。宜<sup>7)</sup>用<sup>7)</sup>時美

食べ物の名数

菓云々。

唐菓子。

(中略)

干菓子。

松實。栢實。栢榴。干棗。

松子。五菓子ト云。イリテカハムキテモル。

栢子。コレモイリテモル。

栢榴。カハムキテモル。

干棗。熟シタル棗ヲカハムキテ。ムシテホス。アマヅラヲヌルト云々。イクタビモホスタビニコノ定ニスベシ。

栗。搔栗ニテモルベシ。

(裏書)

松ノミナキ時。シロキサ、ゲヲモル。

栢ナキ時。粉餅ノヤウニツクリテ。サクツライレクシテイリテ。カタナニテウヘヲコソゲテモル。

棗ナキ時。クシガキヲモル。

(注：桜井ら<sup>18)</sup>は文中のサクツラは甘葛煎かという。また杏西方は杏南方の誤りか。)

(注 15) 『守貞漫稿』<sup>19)</sup> 後集卷一 食類 (『類聚 近世風俗志』第二十八編 食類)

菓子 古ハ桃、柿、梨、栗、柑子、橘ノ類ノ、凡テ菓實ヲ菓子ト云コト勿論也、今世ハ右ノ菓實ノ類ヲ、京坂ニテ和訓ヲ以テクダモノト云、江戸ニテハ水グワシト云也、是干菓子、蒸菓子等ノ製アリテ、此類ヲ唯ニ菓子トノミ云コトニナリシニヨリ、對レ之テ菓實ノ類ハミヅ菓子ト云也、<sup>4)14)</sup>

(注 16) 『和漢三才図会』<sup>12a)</sup> 卷第百五 造釀類

沙糖漬菓子

△思うに、蜜柑・仏手柑・天門冬・生薑・冬瓜の類は、みな砂糖に漬けて菓子にする。<sup>1)</sup>

(注 17) 『類聚雜要抄』<sup>13)</sup> 卷第一

一 花山院廂大饗

花山院内大臣庇大饗

平大饗目錄

尊者前机二前 (中略) 四種者

菓子梨子。棗。 (中略)

家主前一脚 二種物

菓子梨子。棗。

(注 18) 『小學紺珠』<sup>22)</sup> 卷十 動植類

三桃

荆桃今櫻桃 冬桃子冬熟 榲桃實以桃而小 ○賦爾雅 潘岳閑居 三桃表 櫻胡之別

(注 19) 『潘岳閑居賦』 (『文選』<sup>23ab)</sup> 第十六卷 志下、潘安仁、閑居賦に所収)

三桃表シ櫻胡之別ヲ。〔注〕翰曰、三桃侯桃櫻桃胡桃也。

(注：訓点は『文選正文』<sup>23c)</sup>による。潘岳は西晋時代(247年-300年)の文人、字は安仁。なお、李善による註の『文選』<sup>23d)</sup>には侯桃の語はない。)

(注 20) 『小學紺珠』<sup>22)</sup> 卷十 動植類

三栗

鋤栗民相助一井之中所出九夫之稅栗 屋栗民有田不耕所罰 間栗間民無職事者所出  
○周礼旅師注典稱謂三者之栗

(注 21) 『類聚名物考 (四)』<sup>25)</sup> 卷二百十五 飲食部四總類 雜品 ○五果に

〔東方朔占書〕李杏桃棗

(中略)

〔東方朔占書〕欲知五穀之収否、但看五菓之盛衰、李主小豆、杏主大麥、桃主小麦、栗主稻、棗主禾、北山醫話中

とある。

『北山醫話』<sup>26)</sup> 卷中をみると次のような記述がある。

桃葉収小麦

(中略)

五菓應五穀、

桃ハ主ナルヲ小麦也、東方朔ヲ占書云、欲知五穀之収否、但看五菓之盛衰、李ハ主ナリ小豆、杏ハ主ナリ大麥、桃ハ主ナリ小麦、栗ハ主ナリ稻、棗ハ主ナリ禾、

(注 22) 『三国志 魏書』<sup>27)</sup> 卷十六 列傳 鄭渾

轉為山陽魏郡太守、其治放此、又以郡下百姓、苦乏材木、乃課民樹榆爲籬、並盆樹五果、榆皆成藩、五果豐實。

(注：訓点は『大漢和辞典』五果<sup>1)</sup>による。)

(注 23) 『五行大義 上』<sup>28b)</sup>

第三、論配氣味

五果則子以配木、核以配火、皮以配金、殼以配水、房以配土。子梨橘之属、核桃李之属、皮柑橘之属、殼胡桃栗之属、房蒲陶之属。子取ヲ其含潤、如木生光潤、子實茂盛。核取ヲ其在肉内、不レ堪食、如火陰在肉内、無所レ堪容。皮取ヲ其厚息、如金氣衰老、物至西方而急縮也。殼取ヲ其肉在肉内堪食、如西水陽在肉内、堪レ能容納也。房取ヲ其結聚、如土物皆聚也。此則總論穀菓、以配五味、則

略如<sub>二</sub>前釋<sub>一</sub>。

(五果は、則ち子は以て木に配し、核は以て火に配し、皮は以て金に配し、殻は以て水に配し、房は以て土に配す。子は梨<sup>り</sup>桃<sup>とう</sup>の属、核は桃李<sup>り</sup>の属、皮は柑橘<sup>かんきつ</sup>の属、殻は胡桃<sup>くるも</sup>栗<sup>り</sup>の属、房は蒲陶<sup>ぶたう</sup>の属、子は、その潤を含みて、木の光潤に生じ、子実茂盛なるがごとき取る。核は、その肉の内に在りて、食<sup>くら</sup>ふに堪へず、火の陰の内に在りて、堪容するところなきがごとき取る。皮は、その厚急なること金気衰老して、物西方に至りて、急縮なるがごとき取るなり。殻は、その肉の内に在りて、食するに堪ふること水の陽の内に在りて、能く容納するに堪ふるがごとき取るなり。房は、その結聚すること土の物みなここに聚るがごとき取る。これ則ち総じて殻菓を論じ、以て五味に配するは、則ち略ぶ前釈のごとし。) 28a)

(注 24) 『重廣補註黄帝内経素問』<sup>29ab)</sup>第七卷 蔵氣法時論篇第二十二

肝色青，宜食甘，粳米牛肉棗葵皆甘（中略）。心色赤，宜食酸，小豆犬肉李韭皆酸（中略）。肺色白，宜食苦，麥羊肉杏薤皆苦（中略）。脾色黃，宜食鹹，大豆豕肉栗藿皆鹹（中略）。腎色黑，宜食辛，黃黍雞肉桃蔥皆辛（中略）。辛散，酸收，甘緩，苦堅（中略）。毒藥攻邪（中略）。五穀爲養謂粳米小豆麥大豆黃黍也、五果爲助謂葵桃李杏栗棗也、五畜爲益謂牛羊豕犬雞也、五菜爲充謂葵藿薤蔥韭也（中略）。氣味合而服之，以補精益氣（中略）。此五者，有辛酸甘苦咸，各有所利，或散或收，或緩或急，或堅或軟，四時五藏，病隨五味所宜也（略）。

薤蔥韭也（略）<sup>1)</sup>

(注 25) 『荆楚歲時記』<sup>30b)</sup>

(三八) 十五日、孟蘭盆会

七月十五日、僧尼道俗、悉く盆を営み諸仙に供す。

(中略) 『孟蘭盆經』を按ずるに云う。(中略)

七月十五日に至り、当に七代の父母の厄難中の者の為に、百味・五菓を具え、以て盆中に著き、十方の大徳を供養すべしと。(後略)

(注 26) 『續々修東大寺正倉院文書』<sup>31)</sup>四十三帙十六

天平寶字六年（762年）潤十二月六日

○造石山院所解<sup>正倉院文書</sup>

(續々修<sup>四十三帙十六</sup>)

解 申請用錢并賣綿價事（中略）

用一百卅五貫五十九文（中略）八十文鹽五果

直 果別十六文（中略）

右、買雜物如件、以鮮、六年（○天平寶字）潤十二月六日 下道主上馬養

(注 27) 『西宮記』

木物枝物者菓子なり龍をくみて薄様を敷て五菓を人て木枝或ハ心松に付るなり河海に引

(注：『類聚名物考（四）』<sup>25)</sup>五菓に記載がある。訓点も同書<sup>25)</sup>による。)

(注：『河海抄』<sup>38)</sup>の記述は(注<sup>34)</sup>)にある通りである。『西宮記』<sup>32)</sup>における所出個所は未詳。)

(注 28) 『新儀式』<sup>33)</sup>第四臨時上

天皇遷御事（中略）

乘輿到<sub>二</sub>前殿<sub>一</sub>。陰陽頭参上。散<sub>二</sub>供殿上<sub>一</sub>。着<sub>二</sub>御御座<sub>一</sub>。先供<sub>二</sub>五果<sub>一</sub>。<sup>16)</sup>

(注：『新儀式』は平安前期の宮廷儀式や庶政の手続きの規定書。村上天皇朝に成立。)

(注 29) 『権記』<sup>34)</sup>長保二年八月十日甲寅

(中略)

小舍人貞正所進瓜、以五果奉送<sub>二</sub>上府<sub>一</sub>、其味異近日所見、可謂邵平之種故也、

(注：『新儀式』は平安前期の宮廷儀式や庶政の手続きの規定書。村上天皇朝に成立。)<sup>16)</sup>

(注 30) 『中右記』<sup>35)</sup>（土牛童子追儼）

大治五年十二月廿四日、(中略) 左衛門督實行被<sub>レ</sub>申云、廿六日大炊殿御渡之事被<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>人々<sub>一</sub>、大略一同申云、黃牛五菓御前物儼儀可<sub>レ</sub>候也、雖<sub>レ</sub>舊所<sub>二</sub>被<sub>レ</sub>作改<sub>一</sub>所、 已有<sub>二</sub>犯土<sub>一</sub>、黃牛最可<sub>レ</sub>候之由予申了、

(注：訓点は『古事類苑』<sup>14)</sup>による。)

(注 31) 『類聚雜要抄』<sup>13)</sup>卷第一

御齒固供<sup>御同脇御膳屠蘇酒事腹赤魚亦御嘗事</sup>  
七種若菜<sup>供餽次</sup> 十五日粥<sup>供御次</sup>

三月三日餅 五菓

(中略)

永久五年七月二日

(中略)

五進。臺五菓。<sup>松子。柏子。干棗。14) 16)</sup>  
<sup>石榴。搗栗。</sup>

(中略)

九進酒銚子。

第二三日<sup>二</sup>ハ不<sub>レ</sub>進<sub>二</sub>五菓子<sub>一</sub>。例菓子進<sub>レ</sub>之。又

進<sub>二</sub>追物<sub>一</sub>。<sup>時美物ハ種計也。</sup>

(中略)

『類聚雜要抄』<sup>13)</sup>卷第二

康平六年七月三日壬寅

食べ物の名数

(中略)

家長母堂内南面而坐。食五菓飲酒醕。

五菓。棗。李。栗。杏。桃也。  
若無者以美名菓用之。

(注 32)『明月記』<sup>36)</sup>嘉祿元年十月十六日。

入御之後吉書、可供五菓。幼主御事、又内府御命  
可、供、之、  
云、雖有夫妻子息移徙、五菓必一人供之、  
不可有兩方云々、聞此說中、殿下仰云、  
行幸時具天子、又供后宫、全不可限一人、  
尤可供兩方者、說云、有其  
慮云々、

(注：訓点は『類聚名物考(四)』<sup>25)</sup>による。)

(注 33)『二中歴』<sup>37)</sup>第八 供膳歷

大饗 尊者

唐菓 (中略) 木菓 梨、棗、柑、獼猴桃

(中略)

納言以下

唐菓 (中略) 木菓 梨、棗、柑 (中略)

辨少納言

唐菓 (中略) 木菓 梨、棗 (中略)

外記史 (中略)

唐菓 (中略) 木菓 梨、柑 (中略)

史生

中純物六坏 餅、伏菟、鉤、大柑、小柑、串柿、

(中略)

五菓

柑 橘 栗 柿 梨一云 東 南 西 北 中央  
李、杏、桃、栗、棗、  
一云 松子、棗、石留、橘、栢、近代  
用之<sup>4)</sup>

(注 34)『河海抄』<sup>38)</sup>卷第一

おまへのおりひつこものなと 獻物也。或籠物  
藥籠ともいふ。西宮記云、木物枝物共菓子也。籠をくみ  
て薄様を敷て五菓を入れて、木枝或松に付なり。  
大臣以下取之、後には膳部に給て調せらる。元  
服の時の人のさ、けたる物也。掌中曆曰、五  
菓、柑橘栗柿梨<sup>38b)</sup>

(注：〈掌中曆曰、五菓、柑橘栗柿梨〉の個所の「柿」  
については、『掌中歴』から編集した『二中歴』<sup>37)</sup>の五  
菓のを条を見るに、柿である(注33)。『河海抄』では写  
本により「柿」とも「柿」とも「柿」とも読める。  
『河海抄・花鳥余情』<sup>38b)</sup>は柿と活字化してしており、  
『類聚名物考(四)』<sup>25)</sup>五菓〔河海抄〕は柿と活字化し  
ている。〈\*25 柿〉の項も参照。)

(注 35)太素経は『黄帝内経太素』<sup>29)</sup>のことで、『太  
素』ともいう。唐代7世紀頃の楊上善が、『素問』  
と『靈樞』を合わせて編集したものである。

(注 36)『小學紺珠』<sup>22)</sup>卷十 動植類<sup>1)</sup>

五果

桃 李 杏 栗 棗 ○素問 家語孔子曰果属有  
六而桃為下 魏鄭渾為魏  
郡太守益  
樹五果

(注 37)『羣書拾唾』<sup>41)</sup>卷之十 動植食物第十

五果 桃李杏棗栗

(注 38)『拾芥抄』<sup>42)</sup>下卷 飲食部第二十八

五菓 李東方  
酸 杏南方  
苦 棗中央  
甘 桃西方  
辛 栗北方  
鹹  
一説、松子 棗 石留 橘 栢 近代用之  
又説、柑 栢 栗 柿 梨<sup>42a)</sup>

(注 39)『和爾雅』<sup>43)</sup>卷之六 果菰門第二十

五菓 素門云五 李東 杏南 棗中 桃西 栗北  
五菓<sup>リ</sup>為助

(注 40)『増補下學集』<sup>44)</sup>卷下之三 第十六 數量門

五菓 李 杏 棗 桃 栗 也

(注 41)『和漢名数』<sup>45)</sup>下卷 動植第九

五菓 李東 杏南 棗中 桃西 栗北  
素門云五菓<sup>リ</sup>為助

(注 42)『譬喩盡並古語名数』<sup>46)</sup>◎之部

五菓は李東 杏南 棗中 桃西 栗北  
くは り きやう さう とう りつ  
すもも あんず なつめ も、 くり

(注 43)『合類節用集』<sup>47)</sup>卷七 數量部

五菓 李。杏。棗。桃。栗

(注 44)『和漢音釋書言字考節用集』<sup>48)</sup>卷第十 數量門

五菓 李。杏。棗。桃。栗

(注 45)『大和本草』<sup>11)</sup>卷之二 論用藥

五果 李杏棗桃栗 以上素問

(注 46)『黄帝甲乙經』は『黄帝三部針灸甲乙經』、  
『針灸甲乙經』とも呼ばれる。西晋3世紀頃に皇甫  
謐によって『素問』、『九卷(靈樞)』、『明堂(孔穴  
針灸治要)』の3書より編纂されたとされるが、唐  
代初期の成立であろう。

(注 47)『五行大義』<sup>28)</sup>は五行思想に基づき穀や菓など  
を配当している(注23)。これを中村ら<sup>28ab)</sup>に従いつつ  
整理し直すと次のようになる。

五行	木	火	土	金	水	
方角	東	南	中央	西	北	
季節	春	夏	季夏	秋	冬	
五味	酸	苦	甘	辛	鹹	礼記月令云、 礼記云
五臭	膻	焦	香	腥	朽	礼記月令云 礼記云
五味	醴	酒	蜜	薑	塩	鄭玄云
五穀	麻	麦	米	季	大豆	黄帝甲乙經云
穀・果	李	杏	棗	稻米	栗	一云

五菜	韭	薤	葵	葱	かく 薺 まめのは	黄帝甲乙経云
五畜	犬	羊	牛	鶏	てい 薺 ぶた	黄帝甲乙経云
五石	曾青	雄黄	玉	金	赤石脂	本草
五草	こみし 五味子 さねかづら	てんもんとう 天門冬	ぶくりよう 茯苓	けいしん 桂心	げんしん 玄参 ごまのはぐさ	本草
五虫	いぬ 伊威 わらじむし	ぜんだ 蛭蛇 にしきへび	ひれい 蜚零 土綿	げんこん 蛭蝮 やすで	とかげ 蜥蜴	本草
五穀	芒 とげのある穀物	散 のび散らばっ ている穀物	萃 細かい粒の集 まっている穀物	房 きちんとした形に なっている穀物	莢 さやになって いる穀物	五行大義
	大小麦	麴黍 きび	稷粟 あわ	胡麻 ごま	大小豆	
五菓	子 たねの ある果物	核 大きな種 のある果物	房 ふさの ある果物	皮 ふきの ある果物	殻 殻の ある果物	五行大義
	梨棗 なし、からなし	桃李 もも	蒲陶 ぶどう	柑橘 みかん	胡桃・栗	

(注 48) 『榘原本下学集』<sup>49)</sup> 草木門 第十四五菓 松 柏 栗  
棗 榘 榴(注 49) 『源氏物語湖月抄』<sup>50)</sup> 「桐壺」頭注

こ物〔河〕獻物也。或籠物、葉籠ともいふ。  
籠をくみて、薄様をしきて、五菓を入れて、籠  
物て木の枝或は松に付る也。大臣以下これをと  
り、後には膳部に給て調せらる也。五菓は柑、  
橘、栗、杼、梨。

(注：「柑、橘、栗、杼、梨」の「杼」は『湖月抄』の  
写本<sup>50ab)</sup>を見るに、「杼」と読める。また、活字本の  
『源氏物語湖月抄』<sup>50cd)</sup>及び『増註源氏物語湖月抄』<sup>50ef)</sup>  
は「杼」と活字化している。しかしながら、『河海抄』  
の写本をいくつか見るに、「柿」とも「柿」とも「柿」  
とも読める(注<sup>34)</sup>)。なお、『増註源氏物語湖月抄』<sup>50ef)</sup>は  
上文中の〔河〕を(河)とするが、(河)は牡丹花肖柏『咲  
花抄』の略なので、ここは(河)の誤植である。)

(注 50) 『當流獻方口傳書』<sup>51)</sup> 三卷

本式菓子といふは五菓と云ひて栗柿榘桃梨子な  
り

(注：『本朝食鑑 2』<sup>62a)</sup> 榘子の条の島田勇雄の訳注に引  
用される。)

(注 51) 『蜀都雜抄』<sup>52)</sup> (明) 陸深〔撰〕

梵文甚細、如叙果有五、棗杏等、謂之核  
果、梨奈等、謂之膚果、椰子・胡桃等、謂之  
殼果、松子・柏仁等、謂之櫨果、大小豆  
等、謂之角果、核、殼易解、膚、皮膚可啖  
也、角、華言亦稱豆角、惟櫨頗異、按字  
書、空外反・麤糠皮、謂之櫨。

(注：調点は『大漢和辞典』五果<sup>1)</sup>による。)(注 52) 『名数語彙』<sup>53)</sup>

五菓

核果 桃李也 殼果 胡桃也 膚果 〔櫨〕梨也

櫨果 蔓豆也

(注：〔櫨〕は推定個所。)

(注 53) 『秋苑日涉』<sup>54)</sup> 卷之九

果子

説文曰、果木實也、俗从レ艸者誤、類書纂要曰、説文  
曰、在木曰果、

在地曰蔬、有核曰果、無核曰蔬、植生 周必大 高宗  
曰、蔓生曰蔬、木實曰果、草食曰蔬、

幸張府・節次略、香圓、眞柑、石榴、橙子、鶯  
梨、乳梨、榘植、花木瓜、謂之八果、荔枝、  
圓眼、香蓮、榘子、榛子、松子、銀杏、梨肉、  
棗園、蓮子肉、林檎、謂之乾果子、此其正  
名也、後世粉麴飴糖、爲果花禽魚之形者、亦  
通稱果子、(以下略)

(注：調点は『古事類苑』<sup>14)</sup>による。)(注 54) 『管子』<sup>57)</sup> 卷一 立政第四

君之所務者五一日(中略)四曰六畜不育於  
家、瓜瓠草菜百果不備具ナラ、國之貧也。  
(中略)

六畜育於家、瓜瓠草菜百果備具スルハ、國之富  
也。

(注 55) 『西崑酬唱集』<sup>59)</sup> 卷下

櫻桃 楊億

離宮時薦罷。樂府艷歌新。石髓凝秦洞。珠胎剖  
漢津。三桃聊並列。百果獨先春。清籟來君賜。  
雕盤助席珍。甘餘應受和。圓極豈能神。楚客便  
羊酪。歸期負紫莩。

(注 56) 『本草和名』<sup>66)</sup> 下巻第十七巻 菓冊五種梨 (中略) 杼子 (中略) 和名奈之『十巻本 倭名類聚抄』<sup>9)10)</sup> 巻九 果藟部

梨子 唐韵云、梨、力脂反、奈之、果名也、兼  
名菴云、一名含消、

(注 57) 『本草和名』<sup>66)</sup> 上巻第十二巻 木上 卅七種

酸棗 (中略) 一名山棗樹子 (中略) 一名棗實  
(中略) 和名須岐奈都女 一名佐祢布止

『本草和名』<sup>66)</sup> 下巻第十七巻 菓冊五種

大棗 一名乾棗 一名美棗 一名良棗 (中略) 猗棗  
(中略) 和名於保奈都女

生棗 (中略) 和名奈末奈都女、(注 58) 『十巻本 倭名類聚抄』<sup>9)10)</sup> 巻九 果藟部

棗 本草云、大棗、一名美棗、音早、亦作棗、



食べ物の名数

- 奈都米、  
 (注 59)『本草和名』<sup>66)</sup>下巻第十七巻 菓冊五種  
 安石榴楊玄探音留 花名延年花 (中略) 一名塗林一名若榴 (中略) 和名佐久呂  
 『十巻本 倭名類聚抄』<sup>9)10)</sup>巻九 果菰部  
 石榴 兼名苑云、若榴、音留、佐久路、今案若正作レ楮、見二四聲字苑一、石榴也、  
 (注 60)『本草和名』<sup>66)</sup>下巻第十七巻 菓冊五種  
 桃核桃臬 (中略) 一名桃奴 (中略) 桃臺 (中略) 山竜桃 (中略) 榑父母 (中略) 和名毛々  
 (注 61)『十巻本 倭名類聚抄』<sup>9)10)</sup>巻九 果菰部 果菰類  
 桃子 漢武内傳云、西王母桃、三千年一生レ實 西王母者仙人名也、桃音陶毛々、楊氏漢語抄云、錦桃、  
 (注 62)『爾雅注疏』<sup>73)</sup>巻九 釋木第十四  
 楔、荊桃。〔注〕今櫻桃。旄、冬桃。〔注〕子冬桃。榑桃、山桃。〔注〕實如レ桃而小、不レ解レ核。○楔音受 榑音斯。〔疏〕楔、荊桃至山桃。○釋曰別桃類也。楔、一名荊桃。郭云、今櫻桃。廣雅云、櫻桃含桃也。月令仲夏云、羞以 含桃是也。桃子冬熟者名。旄、生二山中一者名榑桃。郭云、實如レ桃而小、不レ解レ核。實如桃而小不解核。  
 (注：訓点は大漢和辞典<sup>7)</sup>による。)  
 (注 63)『本草和名』<sup>66)</sup>下巻第十七巻 菓冊五種  
 枇杷葉 (中略) 和名比波  
 『十巻本 倭名類聚抄』<sup>9)10)</sup>巻九 果菰部 果菰類  
 枇杷 唐韵云、枇杷、琵琶二音、俗云二味杷一、菓木、冬花而夏實也、  
 (注 64)『多識編 (寛永八年刊整版本)』<sup>76)</sup>巻之三 果部第三  
 荔枝 今案加良久多毛乃 異名 タンレイ 丹荔  
 『改正増補多識編 (刊年不明 整版本)』<sup>76)</sup>巻之三 夷果類  
 荔枝 和名 今按スルニ加羅 異名 タンレイ 丹荔 増補異名 離枝リシ網目  
 なお、『羅浮涉獵抄多識編』<sup>76)</sup>果部 荔枝には訓はない。『多識編 (寛永七年刊古活字本)』<sup>76)</sup>果部第十八荔枝には異名の記載がない。  
 (注 65)『本草和名』<sup>66)</sup>下巻第十七巻 菓冊五種  
 櫻桃 一名朱櫻胡頹子 (中略) 一名朱桃一名麦英一名楔 (中略) 一名荊桃 (中略) 棣子 (中略) 櫻桃一名含桃一名荊桃一名麦桃 (中略) 和名波々加乃美、一名加尔波佐久良乃美

- (注 66)『十巻本 倭名類聚抄』<sup>9)10)</sup>巻九 果菰部 果菰類  
 冬桃 傳玄桃賦云、亦有二冬桃一、今按、俗云二霜桃一、是也、冷伴二氷霜一、和レ神適レ意、恣二口所一嘗、  
 (注：訓点は『箋注倭名類聚抄』<sup>9c)10)</sup>冬桃及び『廣文庫』<sup>71)</sup>冬桃による。)  
 (注 67)『呂氏春秋』<sup>79)</sup>巻第五 仲夏紀第五 五月紀を見てみると  
 羞以含桃先薦寢廟蓋進含桃鬻桃鬻鳥所含食故言含桃是月而熟故進之先致寢廟孝而且敬  
 と高誘の注がある。『初學記』<sup>90)</sup>果木部にも次のように『呂氏春秋』が引かれる。  
 『初學記』<sup>90)</sup>正文・巻二十八・果木部・櫻桃第四〔敘事〕(中略)〔事對〕罵含 蟬翳呂氏春秋曰、仲夏之月、羞含桃、高誘注曰、含桃、櫻桃爲鳥所レ含、故曰含桃、傳咸粘蟬賦曰、櫻桃爲樹則多陰、爲果則先熟、  
 和書では『東雅』<sup>3)</sup>巻之十四 果菰第十四 楊梅の条に  
 桜桃を罵桃とも含桃ともいふは、其实罵鳥ノ所レ含ハなるが故と見えたり。詳なる事は、爾雅、禮記、呂氏春秋等の注、陶隱居、蘇頌等の説に見えけり。  
 とある。  
 (注 68)『本草綱目啓蒙』<sup>61)</sup>巻之二十六 果部果之二 山果類  
 櫻桃 ユスラムメ ユスラゴ ユスラ京 ユリサン和  
 〔一名〕朱桃事物異名 石蜜 (以下略)  
 (注 69)『本草和名』<sup>66)</sup>下巻第十七巻 菓冊五種  
 胡桃 (中略) 和名久留美  
 『十巻本 倭名類聚抄』<sup>9)10)</sup>巻四 飲食部 鹽梅類  
 胡桃 七卷食經云、胡桃、味甘温、食レ之有レ油甚美、久留美、博物志云、張騫使二西域一得レ之、  
 (注 70)『本草和名』<sup>66)</sup>下巻第十七巻 菓冊五種  
 榛子出七巻食經 和名波之波美  
 『十巻本 倭名類聚抄』<sup>9)10)</sup>巻九 果菰部 果菰類  
 榛 唐韵云、榛、秦之輕字亦作レ櫛、波之波美、榛栗也、  
 (注 71)『本草和名』<sup>66)</sup>下巻第十七巻 菓冊五種  
 芰実 (中略) 和名比之  
 『十巻本 倭名類聚抄』<sup>9)10)</sup>巻九 果菰部 果菰類  
 菱子 説文云、菱、音陵比之本草和名、(中略)楚謂二之

- 菱<sup>一</sup>、  
音岐、字  
亦作<sup>レ</sup>菱
- (注 72)『本草和名』<sup>66)</sup>下巻第十七巻 菓冊五種  
林檎一名黑琴<sup>出七巻  
食經</sup>  
『十巻本 倭名類聚抄』<sup>9)10)</sup>巻九 果藟部  
林檎子 本草云、林檎、音禽、利宇古字、與<sup>レ</sup>榛相似而小者也、
- (注 73)『本草和名』<sup>66)</sup>下巻第十七巻 菓冊五種  
李<sup>一</sup>一名麦李 (中略) 牛李 (中略) 一名合枝一名麗枝一名青椅一名顔測子 (中略) 和名須毛々々  
『十巻本 倭名類聚抄』<sup>9)10)</sup>巻九 果藟部  
李子 兼名苑云、李子、音里、一名黄吉、須毛々々、
- (注 74)『本草和名』<sup>66)</sup>下巻第十七巻 菓冊五種  
杏<sup>一</sup>一名杏子 (中略) 柵子 (中略) 一名黄吉蓬菜下杏 (中略) 和名加良毛々々  
『十巻本 倭名類聚抄』<sup>9)10)</sup>巻九 果藟部  
杏子 本草云、杏子、上音荳、加良毛々
- (注 75)『本草和名』<sup>66)</sup>下巻第十七巻 菓冊五種  
栗皮奈扶栴<sup>一</sup> (中略) 一名撰子一名掩寸 (中略) 和名久利  
『十巻本 倭名類聚抄』<sup>9)10)</sup>巻九 果藟部  
栗 兼名苑云、栗、力質反、久利、
- (注 76)『本草和名』<sup>66)</sup>下巻第十七巻 菓冊五種  
柑子 (中略) 一名李衡木奴 (中略) 一名金實一名平蹄 (中略) 和名加牟之  
『十巻本 倭名類聚抄』<sup>9)10)</sup>巻九 果藟部 果藟類  
柑子 馬琬食經云、柑子、上音甘、加无之、
- (注 77)『續日本紀』<sup>80)</sup>巻九聖武天皇神龜二年 十一月己丑  
(中略)  
中務<sup>一</sup>小丞從六位上佐味<sup>いものかみ</sup>朝臣虫麻呂、曲鑄正六位上播磨<sup>あたいおと</sup>直<sup>み</sup>弟<sup>おと</sup>兄<sup>あ</sup>並<sup>あ</sup>授<sup>あ</sup>從五位以下<sup>う</sup>。弟兄<sup>あ</sup>初<sup>あ</sup>賚<sup>あ</sup>甘子<sup>かみ</sup>、從<sup>あ</sup>唐国<sup>もみこし</sup>來<sup>あ</sup>レリ。虫麻呂先<sup>う</sup>殖<sup>あ</sup>エテ其<sup>あ</sup>種<sup>あ</sup>結<sup>あ</sup>レリ子<sup>あ</sup>。故<sup>あ</sup>有<sup>あ</sup>此<sup>あ</sup>授<sup>あ</sup>焉。
- (注 78)『十巻本 倭名類聚抄』<sup>9)10)</sup>巻九 果藟部  
橘 兼名苑云、橘、居蜜反、一名金衣、太知波奈、
- (注 79)『大和本草』<sup>11)</sup>巻之十 木之上 果木  
橘<sup>たちばな</sup> タチハナト訓ス ミカンナリ 其花ヲ花タチハナト古歌ニヨメリ 南方温暖ノ地 及海邊沙地ニ宜シ 故紀州駿州肥後八代皆名産也 共ニ南土ナリ 紀州ノ産最佳シ 北土及山中寒冽ノ地ニ宜カラス 故本邦ニテ北州<sup>ミカン</sup>之無シ

(中略)

○本草時珍曰 橘品十有四 今按 韓彦直 橘錄ニ詳ナリ 本邦ニモ數品アリ (中略)

○日本紀 垂仁帝九十年 命<sup>チマ</sup>田道間守<sup>モリ</sup>遣<sup>チマ</sup>常世<sup>モリ</sup>國<sup>ミ</sup> 令<sup>トキシクノカクノミ</sup>求<sup>ミ</sup>非時香菓<sup>ミ</sup> 今橘ト謂是也 今按 ミカン 此時初テ日本ニ來ル 常世ノ國 未<sup>レ</sup>詳<sup>ミ</sup>何地 (以下略)

(注 80)『和漢三才図会』<sup>12)</sup>巻八十七 山果類

橘<sup>みかん</sup> 居蜜反 橘<sup>蜜柑俗</sup> 和名太知波奈

(注 81)『本草綱目啓蒙』<sup>61)</sup>巻之二十六 果部果之二

山果類三十四種 橘

橘<sup>日本</sup> カクハ<sup>古</sup>ミカレグサ<sup>数</sup> (中略) タチバナ<sup>和名抄</sup>カウジ (中略)

今タチバナト呼テ庭際ニ栽ヘ、或ハ春盤ニ用ル者ハ別ニ一種ニシテ、古ヘ呼ブトコロノ、タチバナニ非ズ。八閩通史ノ猴橘ナリ。形金柑ヨリ微大ニシテ皮ノ皺アラク柑ノ如シ。本草或ハ醫書ニ橘ト云フ者ハ皆カウジ類ノ總名ナリ。柑子ハミカン類ノ總名ナリ。

(注 82) コミカンの果実は小さいが甘味が強いので、その系統は各地に広がり、八代みかん<sup>きしゅうみかん</sup>、紀州蜜柑<sup>きしゅうみかん</sup>、ホンミカンなどと呼ばれ、明治中期に温州ミカンが普及するまで日本のみかんの主流であった<sup>83)</sup>。

(注 83)『日本書紀』<sup>84)</sup>巻六 垂仁天皇

九十年の春二月庚子<sup>かのえね</sup>の朔に、天皇、田道間守<sup>すめらみこと</sup>に命<sup>たぢまもり</sup>せて、常世國に遣し、非時香菓<sup>ときじくのかくのみ</sup>を求めしめたまふ。香菓、此には箇俱能未と云ふ。今し橘と謂ふは是なり。

九十九年の秋七月の戊午の朔に、天皇、纏向宮に崩りましぬ。時に年百四十歳なり。

冬十二月癸卯の朔にして壬子に、菅原伏見陵<sup>すがはらのふしみのみさき</sup>に葬りまつる。

明年の春三月の辛未の朔にして壬午に、田道間守<sup>たぢまもり</sup>、常世國より至れり。即ち齋せる物は、非時香菓<sup>ときじくのかくのみ</sup>、八竿八縷なり。(中略)田道間守<sup>たぢまもり</sup>は、是三宅連が始祖なり。

(注 84)『古事記』<sup>85)</sup>中巻

又天皇、三宅連等の祖、名は多遲摩毛理<sup>たぢまもり</sup>を常世の國に遣はして、登岐士玖能迦玖能木實<sup>とこよ</sup>(登より八字は音を以ぬよ)。を求めしたまひき。故、多遲摩毛理、遂に其の國に到りて、其の木實を採りて縷八縷、矛八矛を將ち來りし間に、天皇既に崩りましき。爾に多遲摩毛理、縷四縷、矛四矛を分け

て、大后に獻り、縵四縵、矛四矛をを天皇の御陵の戸に獻り置きて、其の木實を擎げて、叫び哭きて白ししく、「常世の國の登岐士玖能迦玖能木の實を持ちて参りて侍ふ。」とまをして、遂に叫び哭きて死にき。其の登岐士玖能迦玖能木の實は、是れ今の橘なり。<sup>85a)</sup>

(注 85)『古事記傳』<sup>81)</sup>二十五之卷に

○橘ハ、和名抄に、橘、和名太知波奈、とあり、此名ハもち来つる人の名に因りて、多遲麻花と云ふなるべし。

とある。なお、西郷信綱『古事記注釈』<sup>94)</sup>(第三卷第二十五垂仁天皇(統))は「タヂマモリの話」という論考のなかで、本居宣長の説とは逆に、タチバナを守る役目のタチバナモリからのタヂマモリという人名に転訛されたとする説を出している。

(注 86)『続日本紀』<sup>80)</sup>卷十二 聖武天皇天平八年十一月戊寅の条<sup>71)64)</sup>

(中略)

和銅元年十一月廿一日。供二奉<sup>ス</sup>舉國<sup>ノ</sup>大嘗<sup>ニ</sup>。廿五日<sup>ノ</sup>御宴<sup>ニ</sup>。天皇譽<sup>ヲ</sup>忠誠<sup>ノ</sup>之至<sup>ニ</sup>。賜<sup>フ</sup>浮<sup>ノ</sup>杯<sup>ニ</sup>之橘<sup>ヲ</sup>。勅<sup>シテ</sup>曰<sup>ク</sup>。橘<sup>ハ</sup>者果子<sup>ノ</sup>之長<sup>ニ</sup>、人<sup>ノ</sup>之所<sup>ナリ</sup>好<sup>ム</sup>。

柯凌<sup>ギテ</sup>霜雪<sup>ヲ</sup>。而繁茂<sup>シ</sup>。葉經<sup>テ</sup>寒暑<sup>ヲ</sup>而不<sup>レ</sup>彫<sup>マ</sup>。与<sup>ニ</sup>珠玉<sup>ニ</sup>共<sup>ニ</sup>競<sup>ヒテ</sup>光<sup>ヲ</sup>。交<sup>リテ</sup>金銀<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>逾<sup>シ</sup>美<sup>ナリ</sup>。是<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>汝<sup>ガ</sup>姓<sup>ニ</sup>者賜<sup>フト</sup>橘<sup>ノ</sup>宿祢<sup>ヲ</sup>也。(後略)

(注 87)『本草和名』<sup>66)</sup>下卷第十七卷 菓冊五種

柿<sup>仁</sup>音仕<sup>尤不</sup>鳥柿鹿心柿<sup>可食</sup> 柿一名錦葉一名蜜丸一名朱實(中略)和名加岐

『十卷本 倭名類聚抄』<sup>9)</sup>卷九 果藟部

柿 説文云、柿、音市、加岐、赤實果也、

(注 88)『常陸国風土記』<sup>87)</sup>久慈郡の条に

西北帶<sup>ニ</sup>山野<sup>ニ</sup> 椎櫟<sup>櫟栗生</sup> 鹿猪<sup>住之</sup> 凡山海珍味 不<sup>レ</sup>可<sup>ニ</sup>悉<sup>ス</sup>記<sup>ス</sup>

(注 89)『本草和名』<sup>66)</sup>上卷第十二卷 木上冊七種

栢實子人<sup>出蘇</sup> 一名堅剛一名栢<sup>音菊已上二名</sup> 和名比乃美一名加倍乃美

(注 90)『十卷本 倭名類聚抄』<sup>9)10)</sup>卷九 果藟部 果藟類

榧子 本草云、栢實、上音百、一名榧子、上音匪、加閉<sup>10)</sup>

『十卷本 倭名類聚抄』<sup>9)10)</sup>卷十 草木部木類<sup>3)61)</sup>

栢 兼名苑云、栢、音百、一名栢、音菊、加閉<sup>10)</sup>

(注 91)『和漢三才図会』<sup>12a)</sup>卷第八十二 香木類

栢<sup>かえ</sup>〔栢も同じ〕 栢<sup>きく</sup>、側栢<sup>そくはく</sup>〔和名は加閉〕。  
俗に白<sup>あすなろ</sup>檀<sup>からひ</sup>という。また唐櫨<sup>からひ</sup>葉・児手栢ともいう。その材を阿須奈呂という。

『本草綱目』(木部香木類松〔釈名〕)では松(マツ科マツ)と栢(ヒノキ科コノテガシワ、またはシダレトスギ)とを百木<sup>おさ</sup>の長<sup>おさ</sup>としている。およそどんな木もみな陽<sup>ひ</sup>の方に向かうが、栢だけは陰木であって西を指す。ちょうど鍼<sup>はり</sup>が北を指すのに似ている。それで字は白につくる。白とは西方のことである。俗に栢と書く。

(中略)

栢子仁<sup>はくしにん</sup>〔甘辛で平〕肝経氣分の薬である。

(中略)

側栢葉<sup>そくはくよう</sup>〔辛で微温〕

(中略)

△思うに、(中略)

『和名抄』(草木部木類)に、榧、一名は栢〔可<sup>か</sup>之<sup>し</sup>波〕とある。思うに恐らくはこの栢は本当は枹<sup>か</sup>の字であろう。枹と栢とは似ているの伝書の際に誤ったものであろう。後人が改めずそのまま誤りを伝えたのである。〔枹は榧の属、山果部を見よ〕。

また俗に栢に榧<sup>かや</sup>の訓をつける。恐らくこれは栢と栢とが同字(栢は栢の俗字)であることを知らず、〔加閉と加夜と〕和訓が似ているので誤用したのであろう。

(注 92)『和漢三才図会』<sup>12a)</sup>卷第八十八 夷果類

榧<sup>かや</sup>〔音は斐<sup>ひ</sup>〕 栢子<sup>ひし</sup> 赤果<sup>せきか</sup> 玉榧<sup>ぎよくひ</sup> 玉山果<sup>ぎよくざんか</sup>〔和名は加倍。俗に加也という〕  
榧の字は榧とも書く

(中略)

また、『和名抄』(菓藟部菓類)では栢<sup>かえ</sup>を榧<sup>かや</sup>の異名としている。栢と栢とは同字である。それで一般には多く栢を榧<sup>よみ</sup>の訓として用いている。こうした誤りはいずれも『和名抄』から起こったのである〔栢とは松柏の栢である。その木は榧に似ているが異なったものである。〕

(注：島田<sup>12a)</sup>は〈榧 中国の榧も日本のカヤもイチイ科であるが、日本のカヤと同種のものは中国にはない。しかし、香榧などカヤ属のものはあるとされている。〉と注記する。)

(注 93)『箋注倭名類聚抄』<sup>10)</sup>卷九 果藟部 果藟類

榧子

榧子 本草云、栢實、上音百、一名榧子、上音  
匪、加閉

狩谷棧齋はこの後に続けて、次のように注する（原文漢文）。

案ずるに、原著（本草和名）には栢実（はくじつ）は、木部の上品にあり。榧実（けいじつ）は下品にある。二物は同じ物ではないのだ。本草和名に「榧實、和名、加倍乃美、栢実、和名比乃美、一にいう加倍乃美、」とあり、栢実（はくじつ）に二つの訓がある、これは或説に挙げて疑いを引き起こすものである。源君は、榧実（けいじつ）も栢実（はくじつ）もともに加倍乃美（かひのうみ）と訓めるので、誤って一つとしてしまった。そのじつこのような文は本草和名にはない。（中略）案ずるに、源君は誤って二つに分け、栢（はく）と栢（はく）の二字にしてしまったのである。下総本の和名にも、この二字がある。栢（はく）の字が木類（もくるい）にあらわれるのは、この後のことである。

(注 94)『下学集 (室町末期書写本)』<sup>74)</sup>卷之下 草木門  
第十四

(注 95) 『元和本 下学集』<sup>75)</sup> 卷之下 草木門第十四

(注 96) 『多識編 (寛永八年刊整版本)』<sup>76a)</sup> 卷之三 木部  
第四

栢 加恵今案俗曾波多天 **異名** ソクハク 側栢  
(中略)

果部第三

榧 加閉今俗云可也

『改正増補多識編（刊年不明 整版本）』<sup>76a)</sup> 卷之三

木部第九 香木類

ハク 柏 <sup>カ</sup>加<sup>エ</sup>恵<sup>スル</sup>今<sup>ニ</sup>按<sup>ニ</sup>俗<sup>ニ</sup> **異名** <sup>ソクハク</sup>側柏 **増補異名** <sup>キク</sup>掬

(中略)  
ヒジツ 加<sup>カ</sup>惠<sup>エ</sup>今<sup>ニ</sup>俗<sup>ニ</sup>  
榧實 和名 云<sup>ニ</sup>加<sup>カ</sup>也<sup>ト</sup>

(注 97) 『合類節用集』<sup>47)</sup> 卷四

カヤエ 同 又 桑 同 椀 而 大  
框 [多識] 榊 樞 樞 [多識]  
ヒ 同 側 柏 カシハ カタギ 櫛 (略) ハタ

(注98)『本草綱目啓蒙』<sup>61)</sup>卷之三十 木之一 香木類  
三十五種

柏 和名 カヘ 科 コノテガシハ 両面 ハリギ 土州  
 〔一名〕百木長 事物 蒼宮 (中略) 実〔一名〕  
 練形松子 楽譜  
 柏ノ類多シ。凡ソ単ニ柏ト称スルハ側柏、

扁柏ヲ通ジテ言フ。方書ニ柏ト称シ、柏葉、柏子仁ト称スルハ、皆側柏ナリ。故ニ本条モ亦然リ。側柏ハ、コノテガシハナリ。葉ソバタテチ生ジテ掌ヲ立テルガ如シ。故ニ側柏ト云。其葉面背共ニ綠色、故ニ兩面ト云。万葉集十六卷二、奈良山ノ児手柏ノフタオモニト讀リ。(中略)李時珍、柏ノ品類ヲ分ツコト詳ナリ。子ノ形狀ヲトクコト殊ニ明白ナリ。コノ子、即葉用ノ柏子仁ナリ。(略)

(注 99) 『爾雅注疏』<sup>73)</sup>釋木第十四 釋木

柏 栒。〔注〕禮記曰鬯白以栒○栒音菊〔疏〕柏 栒○釋曰柏一名栒○注 禮記曰鬯白以栒○釋曰上雜記文也彼鄭注云所以搗鬱也栒 柏也是也

(注 100) 『本草綱目』<sup>60a)</sup> 卷三十四 木部 木之一 香  
木類三十五種

柏本經上品 【釋名】鞠音菊 側柏

(注：『本草綱目』53 卷瀕湖脈學 1 卷奇經八脈攷 1 卷<sup>60b</sup>)では柏を栢につくる。)

(注 101) 『初學記』<sup>90)</sup>卷二十八 木部 柏第十四

〔敘事〕《爾雅》曰柏，掬也。《史記》曰松柏為百木長而守宮閭。《尚書》曰荊州，厥貢桮榦栝栢。《周官》曰冀州，其利松柏。劉向《列仙傳》曰赤松子好食栢實，齒落更生。《漢武內傳》曰藥有松柏之膏，服之可以延年。《三輔舊事》曰漢諸陵皆屬太常，不屬郡縣，其入盜栢者棄市。《抱樸子》曰天陵偃蓋之松，大谷倒生之栢，凡此諸木，皆與天齊其長，地等其久也。《廣志》曰栢有續栢，有計栢。崔·《月令》曰七月收栢實。

(注 102) 『十卷本 倭名類聚抄』<sup>9)10)</sup> 卷十 草木部 木類

**榭** 本草云、榭、音斛、可之波、唐韻云、柏、音帛、和名同上、木名也、

(注 103) 『本草和名』<sup>66)</sup> 下卷第十七卷 菓卅五種

<sup>仁謂</sup>棕<sub>作奈</sub> 又有林檎<sup>相似</sup><sub>而小</sub>（中略）和名奈以 一名布  
奈江

(注 104)『十卷本 倭名類聚抄』<sup>9)</sup><sup>10)</sup>卷九 果蓏部 果  
蓏類

榛子 本草云、榛子、上音内、字作奈、奈以、一云加良奈之、兼名苑云、榧、音速、一名榹、音榹、奈也。<sup>16)</sup>

(注 105) 『医心方』<sup>40)</sup>卷一第一七卷 菓廿五種

棕（中略）和名奈以<sup>16)</sup>

(注 106)『新撰字鏡』<sup>93)</sup> 卷七 木部

柰奈字樽掩  
松加良奈之

(注 107)『本草綱目啓蒙』<sup>61)</sup> 卷之二十六 果部 果之  
二 山果類 三十四種

柰

ナイ和名鈔 リンキン アカリング ベニリ  
ンゴ加州 ベニコ、同上 リンキ羽州

(注 108)『延喜式』<sup>69)</sup> 卷四十七 左右兵衛府

凡正月上卯。(中略)其御杖メイサ 榎メイサ 三束一林為<sup>16)</sup>  
レ東

(注 109)『十卷本 倭名類聚抄』<sup>9)10)</sup> 卷九 果部 果  
菰類

橙 七卷食経云、橙、宅耕反、安倍太知波奈、似、  
柚而小者也、

(注 110)『本草和名』<sup>66)</sup> 下卷第十七卷 菓冊五種

橙似柚而小出  
七卷食経 櫛小温也出崔  
禹 和名阿倍多知波奈

(注 111)『本草和名』<sup>66)</sup> 下卷第十七卷 菓冊五種

山櫻桃 白櫻子味苦不  
中食 黒櫻子味甜義中食  
出七卷食経 和名也  
末毛々

(注 112)『十卷本 倭名類聚抄』<sup>9)10)</sup> 卷九 果部 果  
菰類

楊梅 爾雅注云、楊梅、夜末毛々、狀似母子、  
赤色、味酸甜可食之、七卷食経云、山  
櫻桃有二種、黒櫻子、和名同上、味甜  
美、可食矣、

(注 113)『本草和名』<sup>66)</sup> 上卷第十一卷 草下六十七種

紫葛 和名衣比加都良

『十卷本 倭名類聚抄』<sup>9)10)</sup> 卷十 草部 草類

紫葛 本草云、紫葛、衣比加豆良、文選蜀都賦  
云、蒲萄亂漬、萄音陶器、漢語抄云、蒲萄、  
衣比加豆良乃実、

## 参考文献

- 1)『大漢和辞典』(修訂版)、諸橋轍次〔著〕；鎌田  
正・米山寅太郎〔修訂〕、大修館書店、1984
- 2)『字通』、白川 静、平凡社、1996
- 3)『新井白石 東雅-影印・翻刻』、新井白石〔著〕；  
杉本つとむ〔編著〕、早稲田大学出版部、1994
- 4)『和菓子の系譜』、中村孝也、国書刊行会、1990  
(注：復刻版。原本は1967年淡交社より刊行。)
- 5) a.『訓讀説文解字注』、(漢)許慎〔撰〕；(清)段  
玉裁〔注〕；尾崎雄二郎〔編〕、東海大学出版会、1981  
-1991/b.『説文解字注』、段玉裁〔注〕、(台北)

芸文印書館、1979

- 6)『正字通』、(明)張自烈〔撰〕、(原書有些字跡不清、  
有些頁殘 古籍)、中國哲學書電子化計劃所収
- 7) a.『集韻』(全10卷)、(宋)丁度等〔奉勅修定〕  
(『辭書集成』23-24、谷風主〔編〕、(北京)團結  
出版社、1993に所収)/b.『集韻』(全10卷)、  
(宋)丁度等〔修定〕、(重慶)川東官舎、1876、  
早稲田大学図書館古典籍総合データベース所収/  
c.『集韻』(10卷)、(宋)丁度 等〔修定〕、(欽  
定四庫全書)本。本書10卷、拆分成10冊。影印古籍  
欽定四庫全書・經部十・小學類)、中國哲學書電子化  
計劃所収
- 8) a.『漢書』、(漢)班固〔撰〕；(唐)顏師古  
〔注〕；楊家駱〔主編〕、台湾中央研究院歷史語言  
研究所 漢籍電子文獻資料庫所収/b.『和刻本正  
史 漢書(影印本)(一)帝紀；表；志；列傳  
(上)』、班固〔撰〕；桃林軒玄朴〔點〕；長澤規矩  
也〔解題〕、古典研究會〔出版〕、汲古書院〔發  
行〕、1972/c.『漢書』、(漢)班固〔撰〕；(唐)  
顏師古〔注〕、(武英殿二十四史)本)、中國哲學書  
電子化計劃所収
- 9) a.『被斎書入倭名類聚鈔』、源 順〔著〕；辻村敏  
樹〔編〕、早稲田大学出版部、1987/b.『倭名類  
聚鈔』、源 順〔著〕；正宗敦夫〔編纂校訂〕、現  
代思潮社、1978(注：底本は二十卷本的那波道圓〔校  
注〕「元和古活字本」。)/c.『諸本集成 倭名類聚抄  
本文篇・索引篇・外篇』(増訂再版)、源 順  
〔撰〕；京都大學文學部國語學國文學研究室  
〔編〕、臨川書店、1971(注：[本文編]は「箋注倭名  
類聚抄」、『真福寺本(稲葉通邦摹刻本)』、『元和古活字  
那波道圓本(二十卷本)』及び「高山寺本(史料編纂所  
古簡集影)」の複製。)/d.『倭名類聚抄 天文本』、  
源 順〔撰〕；東京大學國語研究室〔編〕；宮澤俊  
雅〔解題〕、汲古書院、1987/e.『倭名類聚抄：  
京本／源 順〔著〕・世俗字類抄：二卷本』、東京  
大學國語研究室〔編〕；宮澤俊雅・峰岸 明〔解  
題〕、汲古書院、1985
- 10) a.『箋注倭名類聚抄』、狩谷掖齋〔著〕；京都帝國  
大學文學部國語學國文學研究室〔編〕、全國書房、  
1943(注：明治16年-1883 印刷局刊本の複製。)/b.  
『諸本集成 倭名類聚抄 本文篇・索引篇・外篇』  
(増訂再版)、源 順〔撰〕；京都大學文學部國語  
學國文學研究室〔編〕、臨川書店、1971-1977  
(注：[本文編]は明治16年-1883 印刷局刊「箋注倭

- 名類聚抄」も所収。)／c.『箋注倭名類聚抄』, 狩谷掖齋〔著〕; 野口恒重〔編輯・発行〕, 曙社出版部, 1931 (国立国会図書館デジタルコレクション近代デジタルライブラリー所収)
- 11) a.『大和本草』(全2冊), 益軒貝原篤信〔原著〕; 白井光太郎〔考註〕(第一冊); 岸田松若・田中茂穂・矢野宗幹〔考註〕(第二冊), 有明書房, 1975／b.『大和本草』(16巻附録2巻諸品図2巻), 貝原益軒 他〔著〕, 宝永6年-1709, 中村学園大学・中村学園短期大学部図書館電子図書館 貝原益軒アーカイブ所収／c.『大和本草』(16巻附録2巻諸品図2巻), 貝原益軒 他〔著〕, 永田調兵衛〔出版〕, 宝永6年-1709, 国立国会図書館デジタルコレクション古典籍資料(貴重書等)所収
- 12) a.『和漢三才図会』(全18巻), 寺島良安〔著〕; 島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳〔訳注〕, 平凡社, 1985-1991／b.『和漢三才圖會』(上・下2冊), 寺島良安〔編〕; 和漢三才圖會刊行委員会〔編集〕, 東京美術, 1970／c.『倭漢三才図会』(105巻首1巻尾1巻), 寺島良安〔編〕; 秋田屋太右衛門ほか〔出版〕, 文政7年-1824, 国立国会図書館デジタルコレクション古典籍資料(貴重書等)所収
- 13) a.『類聚雜要抄』(『群書類従 第二十六輯 雑部』(訂正3版)(群書類従巻四百七十, 雑部廿五類), 塙保己一〔編〕, 續群書類従完成會, 1960に所収)／b.『類聚雜要抄』(四巻)(写), 寛文13年-1673, 国立国会図書館デジタルコレクション古典籍資料(貴重書等)所収
- 14) a.『古事類苑』(5版〔縮刷〕普及版), 神宮司廳〔編〕, 吉川弘文館, 1981-1985／b.古事類苑全文データベース・古事類苑ページ検索システム, 国立日本文化センター／c.古事類苑データベース, 国文学研究資料館
- 15)『江家次第』, 大江匡房〔著〕, 承応2年-1653, 国立国会図書館デジタル化資料古典籍資料(貴重書等)所収
- 16)『日本国語大辞典』第二版, 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部〔編〕, 小学館, 2000-2002
- 17) a.『厨事類記』(『群書類従 第十九輯 管弦・蹴鞠・鷹・遊戯・飲食部』(訂正3版)(群書類従巻第三百六十四), 塙保己一〔編〕, 續群書類従完成會, 1960に所収)／b.『厨事類記』(『新校羣書類従 第十五巻』, 塙保己一〔編〕; 川俣馨一〔増訂再編〕; 小関貴久〔補正覆刻・発行〕, 名著普及会, 1977に所収)(注:覆刻版。初版は1929年刊。)
- 18)『日本食物史(上)古代から中世』, 櫻井秀・足立勇〔著〕, 雄山閣, 1994(注:初版は1934年刊。改訂版は1950年刊。)
- 19) a.『類聚近世風俗史 原名守貞漫稿』(上下巻), 喜多川守貞〔著〕; 室松岩雄〔編〕, 榎本書房, 1927／b.『類聚近世風俗志 原名守貞漫稿』(上下巻), 喜田川季莊〔著〕, 国学院大学出版部出版, 1908 (国立国会図書館デジタルコレクション近代デジタルライブラリー所収)／c.『守貞漫稿』, 喜田川季莊〔編〕, 国立国会図書館デジタルコレクション古典籍資料(貴重書等)所収(注:『守貞漫稿』は天保8年-1837起稿, 嘉永6年-1853に一応完成。慶応3年-1867加筆。明治41年-1908に『類聚近世風俗志』の名で刊行。)
- 20)「解説 食物儀礼史における「菓子」「鳥類」」, 島田勇雄(『本朝食鑑2』, 島田勇雄〔訳注〕, 平凡社, 1977に所収)
- 21)『茶道名数事典』, 小田栄一・森谷尅久〔監修〕, 淡交社, 1985
- 22) a.『小學紺珠』(全10巻), (宋)王應麟〔編〕; 村瀬誨輔〔訓點』(『和刻本類書集成 第二輯』, 長澤規矩也〔編〕, 汲古書院, 1976に所収)／b.『小學紺珠』, (南宋)王应麟〔輯〕; 村瀬誨輔〔校正〕, (江戸)岡村庄助, 文政10年-1827, 早稲田大学図書館古典籍総合データベース所収／c.『小學紺珠』, (宋)王應麟〔編〕, (《欽定四庫全書》本。本書10巻, 拆分成7冊。影印古籍 欽定四庫全書・子部十一・類書類), 中國哲學書電子化計劃所収
- 23) a.『文選』, (梁)蕭統〔編〕; (唐)李善・(唐)呂延濟・(唐)劉良・(唐)張銑・(唐)呂向・(唐)李周翰〔註〕, (《摘藻堂四庫全書薈要》本。本書60巻目錄1巻, 拆分成33冊。影印古籍 摘藻堂四庫全書薈要・集部・總集類), 中國哲學書電子化計劃所収(注:本書は宋代成立の「六臣註文選」。)／b.『六臣註文選』, (梁)蕭統〔編〕; (唐)李善・(唐)呂延濟・(唐)劉良・(唐)張銑・(唐)呂向・(唐)李周翰〔註〕, (《四部叢刊初編》中第1894-1923冊。注景上海涵芬樓藏宋刊本 本書六十巻), 中國哲學書電子化計劃所収／c.『文選正文』, 蕭統〔撰〕, 片山兼山〔点〕, 宝文堂, 1870 (国立国会図

- 書館デジタルコレクション近代デジタルライブラリー所収)／**d.**『文選』, (梁)蕭統〔編〕, (唐)李善〔註〕, 《有宋淳熙尤延之本》, 中國哲學書電子化計劃所収 (注: 文選は唐代 658 年成立。)
- 24) 『図説 草木名彙辞典』, 木村陽二郎〔監修〕, 柏書房, 1991
- 25) 『類聚名物考』(全 7 冊), 山岡<sup>まつあけ</sup>俊明〔編〕, 歴史図書社, 1974 (注: 江戸中期の類書。本書は明治 36 年 - 1903 ~ 明治 38 年 - 1905 に刊行された活版本の複製本。)
- 26) 『北山醫話』(全 3 卷), 北山寿安〔著〕, 正徳 3 年 - 1713, Digitalisierte Sammlungen der Staatsbibliothek zu Berlin 所収
- 27) **a.**『三國志 魏書』, (晉)陳壽〔撰〕; (南朝宋)裴松之〔注〕; 楊家駱〔主編史〕(正史／三國志／魏書 凡三十卷／卷十六 魏書十六 任蘇杜鄭倉傳第十六／鄭渾 (P.511), 台湾中央研究院歷史語言研究所漢籍電子文獻所収)／**b.**『三國志 魏書』, 陳壽〔撰〕; 裴松之〔集注〕; 陳仁錫〔評閱〕; 長澤規矩也〔解題〕(『和刻本正史 三國志(一) 魏書(上)』, 長澤規矩也〔編〕, 古典研究會〔出版〕, 汲古書院〔發行〕, 1972 に所収)
- 28) **a.**『五行大義』, 中村璋八〔著〕, 明德出版社, 1973, 中国古典叢書／**b.**『五行大義 上』, (隋)蕭吉〔撰〕; 中村璋八・古藤友子〔著〕, 明治書院, 1998／**c.**『五行大義』, (隋)蕭吉, (原書有些字跡不清、有些頁殘 古籍), 中國哲學書電子化計劃所収／**d.**『五行大義』, (隋)蕭吉, 維基文庫自由的圖書館所収
- 29) **a.**『重広補註黄帝内經素問』, 王冰〔撰〕, 出版地・出版者不明, 早稲田大学図書館古典籍総合データベース所収／**b.**『重廣広補註黄帝内經素問』, (唐)王冰〔注〕; (宋)林億等〔校正〕, 《四部叢刊初編》中第 357 ~ 361 冊・景上海涵芬館藏明翻北宋本 本書二四卷), 中國哲學書電子化計劃所収 (注: 中國哲學書電子化計劃は《欽定四庫全書》本等も所収。)
- 30) **a.**『荊楚歲時記』, (梁)宗懷〔撰〕(『和刻本漢籍隨筆集 第 11 集』, 長澤規矩也〔解題〕, 古典研究會〔出版〕, 汲古書院〔發行〕, 1972 に所収)／**b.**『荊楚歲時記』, 宗懷〔撰〕, 守屋美都雄〔訳注〕, 布目潮風・中村裕一〔補訂〕, 平凡社, 1978
- 31) 『東大寺正倉院文書』, 大日本古文書 (編年文書) (東京大学資料編集所奈良時代古文書フルテキストデータベース所蔵本) 所収
- 32) **a.**『西宮記』(第 1・第 2), 源 高明〔著〕, 故実叢書編集部〔編〕, 明治図書出版・吉川弘文館, 1952, 新訂増補故実叢書／**b.**『西宮記』, 源 高明〔著〕, 書写年不明, 国立国会図書館デジタルコレクション古典籍資料 (貴重書等) 所収／**c.**『西宮記』, 源 高明〔撰〕, 書写年不明, 早稲田大学図書館古典籍総合データベース所収
- 33) 『新儀式』, 撰者不詳 (『群書類従・第六輯 律令部・公事部』(訂正 3 版) (群書類従巻第八十), 塙保己一〔編〕, 續群書類従完成會, 1960 に所収)
- 34) 『権記』, 藤原行成〔著〕(『増補「史料大成」権記一』, 増補「史料大成」刊行会〔編纂〕, 臨川書店, 1965 に所収) (注: 『権記』は正暦 2 年 - 991 ~ 長保 5 年 - 1003 の日記。)
- 35) 『中右記』, 藤原宗忠〔著〕(『増補「史料大成」中右記六』, 増補「史料大成」刊行会〔編纂〕, 臨川書店, 1965 に所収)
- 36) **a.**『明月記 第二』(全 3 卷), 藤原定家〔著〕; 國書刊行会〔編〕, 國書刊行会, 1911 (国立国会図書館デジタルコレクション近代デジタルライブラリー所収)／**b.**『明月記』(全 5 冊), 藤原定家〔著〕; 冷泉家時雨亭文庫〔編〕, 朝日新聞社, 1993-2003
- 37) **a.**『尊経閣善本影印集成 15 二中歴 二 (第五から第十)』, 前田育徳会尊経閣文庫〔編〕, 八木書店, 1997／**b.**『改定史籍集覧 第 23 冊』(新加纂録類第十九 二中歴), 近藤瓶城〔著〕, 近藤出版部, 1902 - 1926 (国立国会図書館デジタルコレクション近代デジタルライブラリー所収)
- 38) **a.**『河海抄』, (傳)兼良〔筆本〕; 四辻善成〔著〕, 天理大学出版部, 1985, 天理図書館善本叢書和書之部第 70, 71 卷／**b.**『河海抄・花鳥余情』, 本居豊穎・木村正辨・井上頼因〔校訂〕, 日本図書センター, 1978, 日本文学古註釈大成 源氏物語古註釈大成 第 6 卷 (注: 國文注釋全書版の復刻。)/**c.**『河海抄』, 四辻善成〔著〕, 書写年不明, 国立国会図書館デジタルコレクション古典籍資料 (貴重書等) 所収／**d.**『河海抄』第 1-20, 四辻善成〔著〕; 源 惟良〔撰〕, 江戸初期写, 早稲田大学図書館古典籍総合データベース所収
- 39) 『医心方 卷三十 食養篇』, 丹波康頼〔撰〕; 榎佐知子〔全訳精解〕, 筑摩書房, 1993
- 40) 『覆刻日本古典全集 醫心方 一』, 丹波康頼〔著〕; 正宗敦夫〔編纂校訂〕, 現代思潮社, 1978

- (注：日本古典全集刊行會 1936 年刊本の複製。)
- 41) 『羣書拾唾』, (明) 張九韶 [編]; 汪道昆 [増]; 吳昭明 [校] (『和刻本類書集成 第四輯』, 長澤規矩也 [編], 古典研究會 [出版], 汲古書院, 1977 に所収)
  - 42) a. 『拾芥抄』, 洞院公賢 [撰]; 洞院実熙 [補修] (『新訂増補 故実叢書 禁秘抄考註・拾芥抄』, 故実叢書編集部 [編], 明治図書出版・吉川弘文館, 1952 に所収) / b. 『拾芥抄』, 洞院公賢 [撰], 前田育徳会尊経閣文庫 [編], 八木書店, 1998 / c. 『拾芥抄』, 清原業賢・清原国賢 [筆], 京都大学電子図書館所収 / d. 『拾芥抄』 (中・下), 洞院公賢 [編]; 洞院実熙 [補], 出版地・出版者不明, 早稲田大学図書館古典籍総合データベース所収
  - 43) 『和爾雅』, 貝原好古 [編輯], (京都) 大井七郎兵衛, 元禄 7 年 - 1694, 早稲田大学図書館古典籍総合データベース所収
  - 44) 『増補下学集』, 東麓破衲 [著]; 山脇道円 [増補]; 大友信一・木村 晟・片山晴賢 [編], 港の人, 1999 (注：影印版底本は『国立国会図書館蔵本』 [寛文 9 年 - 1669, (京都) 飯田忠兵衛他開板]) (注：『増補下学集』は『元和版下学集』を踏襲し、『易林本節用集』などより独自の大幅な増補をしている。)
  - 45) 『和漢名数』 (2 巻) (並列タイトル「増補和漢名数」「新編増補和漢名数」), 貝原篤信 [編輯], (洛陽) 佐野与兵衛 [出版], 元禄 5 年 - 1692 (序元禄 2 年 - 1689), 国立国会図書館デジタルコレクション古典籍資料 (貴重書等) 所収
  - 46) 『譬喩盡並ニ古語名数』 (本文・解説・索引), 松葉軒東井 [編]; 宗政五十緒 [校訂], 同朋舎, 1979 (龍谷大学所蔵, 松葉軒東井自筆本の翻刻)
  - 47) a. 『合類節用集研究並びに索引』, 中田祝夫・小林祥次郎 [著], 勉誠社, 1979 (注：影印篇は国立国会図書館亀田文庫蔵 延宝 8 年 - 1680 本の複製。)/ b. 『節用集大系 第 13・14 巻：合類節用集 (延宝 8 年刊)』, 大空社, 1993
  - 48) a. 『書言字考節用集研究並びに索引』, 中田祝夫・小林祥次郎 [著], 風間書房, 1973 (注：原本は国立国会図書館岡田文庫蔵享保 2 年 - 1717 版。題簽の書名は「増補合類大節用集。)/ b. 『節用集大系 第 81・82 巻：和漢音釈書言字考節用集 (享保 2 年刊)』, 大空社, 1995
  - 49) 『古本下学集七種研究並びに総合索引』, 中田祝夫・林義雄 [著], 風間書房, 1971
  - 50) a. 『湖月抄』, 北村季吟 [撰], (京都) 村上勘左衛門, 延宝元年 - 1673 跋, 早稲田大学図書館古典籍総合データベース所収 / b. 『湖月抄』, 北村季吟 [撰], 延宝 3 年 - 1675, 国立国会図書館デジタルコレクション古典籍資料 (貴重書等) 所収 / c. 『源氏物語湖月抄』 (初篇), 北村季吟 [著]; 猪熊夏樹 [増註訂正], 圖書出版會社, 1891 (国立国会図書館デジタルコレクション近代デジタルライブラリー所収) / d. 『源氏物語湖月抄』, 北村季吟 [著]; 吉澤義則 [監修]; 宮田和一郎 [校合], 文献書院, 1926 (国立国会図書館デジタルコレクション近代デジタルライブラリー) / e. 『増註源氏物語湖月抄 上』 (増補版) (全 3 巻), 北村季吟 [著]; 有川武彦 [校訂]; 猪熊夏樹 [補注]; 三谷榮一 [増補], 名著普及会, 1979 / f. 『源氏物語湖月抄』 第 1, 北村季吟 [著], 日本図書センター, 1978, 日本文学古註釈大成 源氏物語古註釈大成第 9 巻 (注：有川武彦 [校訂]『増註源氏物語湖月抄』の複製。)
  - 51) 『當流獻方口傳書』 (7 巻), 書写年不明, 国立国会図書館デジタルコレクション古典籍資料 (貴重書等) 所収
  - 52) a. 『蜀都雜抄』, (明) 陸深 [撰], 中國哲學書電子化計劃維基区所収 / b. 『蜀都雜抄』, 雲間陸深 [著] (国立国会図書館デジタルコレクション古典籍資料 (貴重書等) 所収の『讀書室日抄』 (山本錫夫 [編], 江戸後期書写) に収載)
  - 53) 『名数語彙』 (本体・解説), 古辭書叢刊刊行會 [編], 古辭書叢刊刊行會, 1973 (注：室町末期書写本。静嘉堂文庫蔵本の複製。)
  - 54) a. 『秋苑日涉』, 村瀬栲亭 [著], 文化 4 年 - 1807 (『日本隨筆全集』 第 1 巻, 国民図書 [編輯], 国民図書, 1927 に所収) / b. 『秋苑日涉』 (12 巻), 村瀬之熙 (村瀬栲亭) [撰], (京都) 林 伊兵衛, 文化 4 年 - 1807, Hathi Trust Digital Library 所収
  - 55) 『甲斐叢記』 (全 10 巻), 大森快庵 [著], (甲府) 藤屋伝右衛門, 嘉永 4 年 - 1851, 国立国会図書館デジタルコレクション古典籍資料 (貴重書等) 所収 (注：別名『甲斐名所図会』。)
  - 56) 『周易正義』, (魏) 王弼・(晋) 韓康伯 [注]; (唐) 孔穎達等 [正義] (a. 『十三經注疏附校勘記 [一] 周易正義・尚書正義』, [清] 阮元 [校勘], 中文出版社, 1989 に所収 / b. 經：十三經；重刊宋本十三經注疏附校勘記；重刊宋本周易注疏附校



- 勘記；周易兼義下經咸傳卷第四；解（P.93-2），台湾中央研究院歷史語言研究所漢籍電子文獻所収（注：周易は易経に記された，爻辞，卦辞，卦画に基づいた占術。）
- 57) a. 『管子全書』，（唐）房玄齡〔注釈〕；（唐）劉績〔増注〕；（明）朱長春〔通演〕（『和刻本諸子大成 第五輯 管氏；商子；韓非子；撰叢書集要』，長沢規矩也〔編〕，古典研究會〔出版〕，汲古書院〔発行〕，1975 に所収）／b. 『管子』，（唐）房玄齡〔注〕，《四部叢刊初編》中第 344～347 冊。景常熟瞿氏鐵琴銅劍樓藏宋刊本 本書二四卷），中國哲學書電子化計劃所収
- 58) a. 『神仙伝』，（東晋）抱朴子葛洪〔撰〕；福井康順〔著〕，明德出版社，1983，中国古典新書／b. 『神仙伝』，葛洪〔作〕；沢田瑞穂〔訳〕（『中国古典文学大系 8 抱朴子・列仙伝・神仙伝・山海経』，平凡社，1969 に所収）／c. 『神仙伝』，（晋）葛洪〔作〕；山之内正彦〔訳〕（『東洋文庫 43 幽明録・遊仙窟他』，前野直彬〔訳者代表〕，平凡社，1965 に所収）／d. 『神仙傳』，（晋）葛洪，中國哲學書電子化計劃所収（『欽定四庫全書』本。本書 10 卷，拆分成 2 冊。影印古籍 欽定四庫全書・子部十四・道家類）／e. 『神仙傳』，（晋）葛洪，維基文庫自由的圖書館所収
- 59) 『西崑酬唱集』，（宋）闕名〔編〕，《四部叢刊初編》中第 1953 冊。景江安傅氏雙鑑樓藏明嘉靖刊本 本書二卷），中國哲學書電子化計劃所収（注：『西崑酬唱集』は中国北宋初期の文人官僚の唱和詩集。楊億の序があり，楊億の編とされる。）
- 60) a. 『本草綱目』，李時珍〔撰〕，（香港）商務印書館，1974／b. 『本草綱目』（27 冊），（明）李時珍〔撰〕；（明）李建中〔図〕，（金陵）胡承竜，万曆 18 年－1590，国立国会図書館デジタルコレクション古典籍資料（貴重等）所収／c. 『本草綱目 53 卷・瀕湖脈學 1 卷・奇經八脈攷 1 卷』，李時珍〔撰〕，（京都）野田彌次右衛門，寛永 14 年－1637，国立国会図書館デジタルコレクション古典籍資料（貴重等）所収／d. 『新註校定國譯本草綱目』，李時珍〔著〕；鈴木真海〔訳〕；白井光太郎〔校注〕；木村康一ほか〔新註校定〕，春陽堂書店，1979（注：初版は 1929-1934 年刊。）／e. 『本草綱目』，（明）李時珍〔撰〕，《欽定四庫全書》本。本書 52 卷，拆分成 49 冊。影印古籍 欽定四庫全書・子部五・醫家類），中國哲學書電子化計劃所収／f. 『本草綱目』，〔明〕李時珍〔撰〕，維基文庫自由的圖書館所収
- 61) a. 『小野蘭山 本草綱目啓蒙－本文・研究・索引－』，杉本つとむ〔編〕，早稲田大学出版部，1974（注：文化 3 年－1806 版の印影本。）／b. 『本草綱目啓蒙』（全 4 卷），小野蘭山〔著〕，平凡社，1991-1992，東洋文庫；531, 536, 540, 552／c. 『本草綱目啓蒙』（全 48 卷），蘭山小野先生〔口授他〕，（東都）須原屋善五郎他，文化 2 年－1805 版，国立国会図書館デジタルコレクション古典籍資料（貴重等）所収／d. 『重訂 本草綱目啓蒙』（全 48 卷），蘭山小野先生〔口授他〕，（江戸）和泉屋善兵衛，弘化 4 年－1847 版，国立国会図書館デジタルコレクション古典籍資料（貴重等）所収
- 62) a. 『本朝食鑑』（全 5 卷），人見必大〔著〕；島田勇雄〔訳注〕，平凡社，1976-1981／b. 『覆刻日本古典全集 本朝食鑑』（上・下 2 冊），平野必大〔著〕；正宗敦夫〔編纂校訂〕，現代思潮社，1979／c. 『本朝食鑑』，人見必大〔著〕（『食物本草本大成 第 9 卷・第 10 卷』，上野益三〔監修〕；吉井始子〔編〕，臨川書店，1980 に所収）／d. 『本朝食鑑』，丹岳野必大千里〔著〕，元禄 10 年－1697，国立国会図書館デジタルコレクション古典籍資料（貴重書等）所収
- 63) a. 『本草図譜』，岩崎常正（岩崎灌園）〔著〕，弘化元年－1844，書写年不明，国立国会図書館デジタル化資料古典籍資料（貴重等）所収／b. 『本草図譜総合解説 第三卷』，岩崎常正〔著〕；北村四郎〔監修〕；北村四郎・塚本洋太郎・木島正夫〔著〕，同朋舎出版，1990
- 64) 『奈良朝食生活の研究』，関根真隆，吉川弘文館，1969
- 65) 『植物渡来考 岡書院版』，白井光太郎，有明書房，1929
- 66) a. 『覆刻日本古典全集 本草和名』，深江輔仁〔著〕；正宗敦夫〔編纂校訂〕，現代思潮社，1978（注：日本古典全集刊行會大正 15 年－1926 刊本の複製。）／b. 『本草和名』，深江輔仁〔著〕，（江戸）和泉屋庄次郎，寛政 8 年－1796 序，早稲田大学図書館古典籍総合データベース所収
- 67) a. 『萬葉集』（全 4 冊），佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之〔校注〕，岩波書店，1999-2003／b. 『萬葉集』（全 4 冊），小島憲之・木下正俊・東野治之〔校注・訳〕，小学館，1994

-1996

- 68) 『食の万葉集-古代の食生活を科学する-』, 廣野卓, 中央公論社, 1998
- 69) 『新訂増補国史大系 第二十六卷 延暦交替式・貞観交替式・延喜交替式・弘仁式・延喜式』, 黑板勝美・國史大系編修會〔編〕, 吉川弘文館, 1965
- 70) 『新訂 牧野 新日本植物圖鑑』, 牧野富太郎〔著〕; 小野幹雄・大場秀幸・西田 誠〔編〕, 北隆館, 2000
- 71) 『廣文庫』(全20冊), 物見高見・物見高量〔著〕, 名著普及會, 1976(注: 覆刻版。初版は1916年刊。)
- 72) 『中葉大辞典』(全5巻), 上海科学技術出版社・小学館〔編〕, 小学館, 1985
- 73) a. 『爾雅注疏』, (晉) 郭璞〔注〕; (宋) 邢昺〔疏〕(『和刻本辭書字典集成 第一巻』, 長澤規矩也〔編〕, 古典研究會〔出版〕, 汲古書院, 1980に所収) / b. 『十三經注疏〔八〕一二爾雅注疏』, (清) 阮元〔校勘〕, 中文出版社, 1989 / c. 經; 十三經; 重刊宋本十三經注疏附校勘記; 重刊宋本爾雅注疏附校勘, 台湾中央研究院歷史語言研究所漢籍電子文獻所収 / d. 『爾雅』, (晉) 郭璞〔注〕, (《四部叢刊初編》中第42冊。景常熟瞿氏鐵琴銅劍樓藏宋刊本 本書三卷附音釋三卷), 中國哲學書電子化計劃所収 / e. 『爾雅注疏』, (晉) 郭璞〔注〕; (唐) 陸德明〔音義〕; (宋) 邢昺〔疏〕(《乾隆御覽四庫全書薈要》本。本書11巻, 拆分成6冊。影印古籍 乾隆御覽本四庫全書薈要・經部), 中國哲學書電子化計劃所収(注: 『爾雅』は中国最古の類語辞典・語釈辞典。漢代初紀元前二世紀頃の学者が經書, 特に詩經の語義解釈を收拾整理補充したものとされている。)
- 74) 『下学集(室町末期書写本)』, 東麓破衲〔著〕, 室町末期書写, 国立国会図書館デジタル化資料古典籍資料(貴重等)所収
- 75) a. 『元和三年本 下学集』, 東麓破衲〔著〕, 元和3年-1617, 国立国会図書館デジタル化資料古典籍資料(貴重等)所収 / b. 『下学集: 元和本』, 龜井 孝〔校訂〕, 岩波書店, 1944
- 76) a. 『多識編自筆稿本刊三種研究並びに総合索引』(印影篇・索引篇二冊組), 中田祝夫・小林祥次郎〔編〕, 勉誠社, 1977(注: 本書は林羅山自筆草稿「羅浮涉獵抄多識編」(慶長17年-1612)(月瀬文庫蔵)・「寛永7年刊古活字本 多識編」(寛永7年-1631年)(大東急記念文庫蔵)・「寛永8年刊整版本 多識編」(寛永8年-1632年)(月瀬文庫蔵)・「刊年不明 整版本 改正増補多識編」(寛文10年-1670, 滝野元敬〔編〕か。)(東京大学総合図書館蔵)の複製本) / b. 『新刊多識編』, 林 羅山〔著〕, 道春〔諺解〕, (京都) 田中長左衛門, 寛永8年-1631, 早稲田大学図書館古典籍総合データベース所収
- 77) 『物品識名』, 岡林清達〔他〕〔稿〕, 永樂堂, 文化6年-1809, 国立国会図書館デジタル化資料古典籍資料(貴重等)所収
- 78) a. 『御定淵鑑類函』, (清) 康熙帝〔勅撰〕, 1910, 中國哲學書電子化計劃所収(《摘藻堂四庫全書薈要》本。本書450巻, 拆分成269冊 影印古籍 摘藻堂四庫全書薈要・子部・類書類) / b. 『御定淵鑑類函』, (清) 張英・(清) 王士禛, 1701, (《欽定四庫全書》本。本書450巻, 拆分成244冊 影印古籍 欽定四庫全書・子部・類書類), 中國哲學書電子化計劃所収
- 79) a. 『和刻本諸子大成 第八輯 呂氏春秋』; (改正) 淮南鴻烈解; 淮南子〔箋釋〕, 長澤規矩也〔編〕, 古典研究會〔出版〕, 汲古書院〔發行〕, 1976 / b. 『呂氏春秋』(上・中・下), 呂不韋〔著〕; 楠山春樹〔訳著〕, 明治書院, 1996-1998 / c. 『呂氏春秋』, 高誘〔注〕; 畢氏〔校正〕, (杭州) 浙江書局, 1875, 早稲田大学図書館古典籍総合データベース所収 / d. 『呂氏春秋』, (漢) 高誘〔注〕, (《四部叢刊初編》中第420-424冊。景上海涵芬樓藏明刊本 本書二六巻), 中國哲學書電子化計劃所収
- 80) 『新訂増補 國史大系 第二巻 續日本紀』, 黑板勝美・國史大系編修會〔編〕, 吉川弘文館, 1966
- 81) a. 『本居宣長全集』巻十一巻(古事記傳三), 本居宣長〔著〕; 大野 晋〔擔當編集〕, 筑摩書房, 1969 / b. 『古事記伝』(全44巻), 本居宣長〔著〕, 刊年不明, 国立国会図書館デジタル化資料古典籍資料(貴重等)所収(注: 『古事記伝』(全44巻)は明和元年-1764~寛政10年-1798に執筆。寛政2年-1790~文政5年-1822に刊行。)
- 82) 『原色日本植物図鑑 木本編Ⅰ・Ⅱ』, 北村四郎・村田 源〔著〕, 保育社, 1971・1979
- 83) 『植物ことわざ事典』, 足田輝一〔編〕, 東京堂出版, 1995
- 84) a. 『日本書紀』(全3冊), 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・藏中 進・毛利正守〔校注・訳〕, 小学館, 1994-1998 / b. 『新訂増補 國史大系 第一巻上 日本書紀 前篇』, 黑板勝美・國史大系編修會〔編〕, 吉川弘文館, 1966 / c. 『訓読日本書紀』, 武田祐吉〔訓読〕, 臨川書店, 1985

食べ物の名数

- 85) a. 『古事記 祝詞』, 倉野憲司・武田祐吉〔校注〕, 岩波書店, 1958／b. 『古事記全講』, 尾崎暢殃, 加藤中道館, 1966
- 86) 『同名異木のはなし』, 満久崇磨, 同朋舎, 1987
- 87) a. 『風土記』, 秋本吉郎〔校注〕, 岩波書店, 1958／b. 『風土記』, 植垣節也〔校注・訳〕, 小学館, 1997／c. 『覆刻日本古典全集 古風土記』(上・下), 与謝野 寛・正宗敦夫・与謝野晶子〔編纂校訂〕, 現代思潮社, 1979 (注: 日本古典全集刊行會大正 15 年刊本の複製。)
- 88) 『印度本節用集<sup>古本四種</sup>研究並びに総合索引』, 中田祝夫〔著〕; 野沢勝夫・根上剛士〔協力〕, 勉誠社, 1974 (注: 「弘治二年本節用集」(東京大学附属図書館蔵本)・「永禄二年本節用集」(大阪府立図書館蔵本)・「堯空本節用集」(宮内庁書陵部蔵本)・「両足院本節用集」(建仁寺両足院蔵本)の複製。)
- 89) 『原色和漢薬図鑑(上)』(改訂 4 刷), 難波恒雄, 保育社, 1986
- 90) a. 『初學記』, (唐) 徐堅等〔撰〕, 出版地不明, 出版者不明, 1961, 同志社女子大学図書館所蔵本／b. 『初學記』(第 2 版), (唐) 徐堅等〔著〕, (北京) 中華書局, 2004／c. 『初學記』, (唐) 徐堅〔著〕, 《欽定四庫全書》本。本書 30 卷, 拆分成 14 冊。影印古籍 欽定四庫全書・子部十一・類書類), 中國哲學書電子化計劃線上圖書館所収
- 91) 『花と木の漢字学』, 寺井泰明, 大修館書店, 2000
- 92) 『日本人と植物』, 前川文夫, 岩波書店, 1973
- 93) 『天治本 新撰字鏡(附 享和本・群書類従本)』(増訂版), 京都大学文学部国語学国文学研究室〔編〕, 臨川書店, 1967
- 94) 『古事記注釈 第三卷』, 西郷信綱, 平凡社, 1988 (2014 年 11 月 6 日受理)